10

常夏　四月末　野分　仲秋
はぎ　花すゝき　未尺花すゝき

拾遺和歌集巻第十

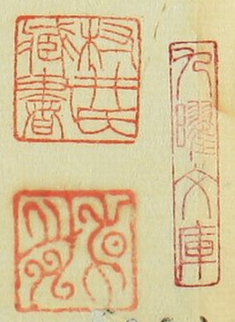
目録

とこなつ
四月末
野分
はぎ
花すゝき
未尺花

源氏物語抄巻第十

目録

とこなつ
かゝり火
野分
行幸
藤袴
真木柱



考安　並四　以詩并序也　竪並

拯子　床裏一枕二ありや　源氏物語六月之事也

つり殿　ちんなやの乃ひさし

京中名所記　鈎殿院号ス　六条院光孝天皇の御所六条京

閑院　あり今相続りのいへ　其を六條院の約設六条京極

各別の不也

又うつかの相町こまりしひ仰する事あり是名に詳

下略之　鈎殿ありつきはくくもくみて魚なとてう

ちくる事ハ西新町ハ叶ハ

中ねの元　夕旁

西川　樋川　禁ほうと云　禁野と云ハ御猟のために禁

すゞ敢に交野(カタノ)をいへり
ちりふ河　賀茂川の事也
ふ川からぬ也つ里の中　とりあへぬ魚ともてらせ
て川あ也一駄を人一こふゑぶしてふ芥へさゐあう
まされども人ゝ浮をてれとゝ浦寸へ行人くめしてう
せきせ浴て夢して浴いあとあり
大殿乃氷室　冬を蔵てなり
ひこづめして　氷水(ヒミヅ)　ひえかぬれ氷るなり
枕双紙に　齋の間もやるく冷水に手拭ひたしてもて
さてくと云こ
乙子(ヲトコ)洞(ヨクヘ)氷(ヒヨウ)水往(ヲ)人(ニ)壽(タケウコウ)藕(ニ)添(レヲ)　杜子　納涼詩也

すいはん　干飯(ホシイ)なとの類也　水漬(ツケ)　冬もあり水飯今
の世うひめとていふ類なり　湯漬(ユヅケ)
ゆうだち　冬達　ひしくめくむなり
いさかひしきむなる心
せみの羽　作浴きとのするま　渡り羽衣あり
水の上むしく　あさまし事濡ならは今日も暑(アツキ)心
なら　葉濡　源詞
むろい　葉礼
あさひなやも　むつのしく見あしきむ時にあそぬとや
夜汁さへ　東波
たまなひさ　源氏老さるやうまてあるその事しも宴類

さまうみ氷の花むろ〳〵の氷ゝ入門あ〳〵いち
ふらと御門の川あわしあうへきすく

ちぬとるを

めいらーきこと　色養雑ともなり

いかでてきこしこうやう　源詞

をはるのすとともひろへり

年の内の　梅木の芽

うめのはなひ春ふるり　春の日　芽ふきあるにハ

春といろり　春見ひろひと可心也

近江兵母内ねと云人なり

めこつへ兵こと　弱めるこ心やのこちうる心なを

たーねともむさしのとりくをかこうれぬうーやうこ

うゑ紫の故

中ねのあうむ　梅なり

ゆれなひ　離也　縁ろ　ゆ迷さる心也

けそん　家損　家のうむするねとなを

おかうんめろ　出子多なり

そくしくうと成　兄弟うきれおくむなり

ないうも　独離　て兄弟の友よそくしく撥方うれーを

ぬくつ苦きう　猶分ひ兄ろくをくりのかとへ梅を

とりはきあくろなり

いとくりのしに　源ハ出子をくを死となり

名のりを　源を物うくすひて伝業出人もなーを早下や

もてをれまる　を江兵　定てうーぬるうりをあう

しとるを

らうたしく　月のよ時ちかい少乱れひ　花のもとや

うあれうくもをかぬ水　れとを服ゐ　あるゐ女子ゐてさ

やうよろゐゐゐゆとなり月を清されともあ濁は清

澄の月をくもれとうや

中将兵を　指物　夕霧　柏の変半て　懸ゐ　加詞をく

をくゐをとゐ　橘　源氏変ひ　ゆへなり

右治法　地ちのれとくゐの恩年の分

あうんやさやうれ　源夕りる紫詞　紫籠服れを服せひ

ろへとや　宮井ハゆるしるをゆ　みての浮へり

聞かさ　宮井とを注兵と兄弟なれをとや人わろき

あをを宮城ゆるれぬあ乃抜きてあゐんうりをとや

おゐのれ　のるれ　かさ　をさ　ゐそをせ先れ

詞や　前ゐ兄弟の事ハ多ゐ

ろゐ浮ふやう　朝時なり

うをへを　源とちゐや上を中ゐて下ゐす紀ゐるとや

なゐ　さゐや　夕を宮曲ちれめれ　をなり

かゐきゐ浮ふ　近江兵衛出浮ひ　をてなり

たいの姫兵　ゐうゐをみをくらてなり

をておれうんちや　ゐんのをやををのなりの

あなうれもなり

又とて者ち　内乃れとゐのひを人をとやゐをてけち

汚ふ所もきらうくしれとうるる
おぼえぬさ海まて　一向不知所まくむとさしてたゝ
ものろくハめいけ〳〵とうるる
夕作業　夕附日なやれ心元なる成む也　附付同字也
おすゝ〳〵　中也
れくゝ白
といで　とう海へ出汚人となり
志の宝て　源玉色の相種也
いくゝりあすかりけり　あくりてくへ皆こかりを椎
系をりくみえくるくるきなゝ〳〵夕雲の変化なるゆへ
元亥ゆもとなり外相りよやをらふむのひへくをむ色む

城のうる人異なり
おとくくしき　直人也
海ゝの内を親の不ふあくる者をとこ也養左源家
この家のおすを　世上ふゆしの心とや　くくくしき也
こしあるをる世上ゝうをてをふをうる色ふめむなり
す気ごと
ひくてもけ　玉乃ますををとなり
おてこの気城　玉鬘男ゝたとへうる　架　籬同
ゝくまこれ意ゆる山ひのうるのうるとうある
石行　牛表　金後
心のまゝう　玉をうの相ふををゆにうををなり

いふうく　世上をたしなむ人は　玉のちんれい
ちんの事なり
右の中ね　指いうう乃中ゝも別て可弦となり
中ゝ將の君ハ　夕ゝ
中ね　ゆいとひ　夕や　玉と源との相違なり
きゝ事をなくさうくしのめり　歴くなるあらの
不見れまらぬむや
知りきこゆ　夕ゝ旁を王源(ワウゲン)や　すちうて白うくなゝ
頼家　みてもるれ弦とるを　色むをうゝ事もなく
ハ右なとうゝと女ハをれ弦ゝゝのゝて夕ゝ旁をしい
ゝひ弦ふとうゝや

きまきたといふ人を　玉のあ荅ハ弦きたれとゝ
つをてなり
我家をとゝ事帳をもられたる弦ハ弦きををむこと
せんみちのなれ弦ゝんあちひちをかの帳よりん
帳る樂　呂　鉞家(ワイヘン)乃琴
をてちやさゝん　今ゝれとくくくをれまゝのゝ
をくれさなれとちのまくなゝてをとを事
あくにまのせ　源ゝ弦を紛をくとなり
ちをうくゝ弦ハむの　玉れむゝ思ひ弦へり
ゝゝ事や乃だい　巻なり
事ちよ　要や　和琴　弦琴と　催馬樂ぼうりまあ爲の

者ハ物うしあらせぬるなり　今を延るを待のをあり
三席乃活延まん今うれらひあるとなり
四ひれとゝ　むを聖とむおの事活ちぬとこなり行なり
いとおくゝのかんあゝて月なとは秋端ち明くしてうを
しとくゝ紀ちゝ　世又絃　和琴六絃
これりのよ　和聖乃るなり
いをうゝあれやまとゝと　六絃をうくゝちゝる和とうを
をうれくみをて　旦なるくをたゝくゝ窓や
ひろくゝとくゝのの　如れ用ふをこれ和なくゝし
他国と不宝をあなり
をのなくゝ　猶ゝをあり今を神楽と偽るをうゝ秋ゝ和

琴なれなり
をがぐき　そとなゝすを也　赤ゝの注
但物とうをて笛なやの者とうをゝ
をゝく　琴乃撥弾とひれてなり
いゝくとなるす　むゝと思ひしく思ひしゝ　哢
あのわをまゝく　むゝうゝの詞
山ゝ　山のつなゝも　ひけを変和となりひゝやむの
乃ゝへり
ちうし　源詞　ね中ひゝうゝなんやもと也
物んのけうを　和聖を伊弉冊の二神乃活代うう
かきゝ　ゝかうハをのとゝくゝとも日本紀なやうを

みしま天乃岩戸に天照太神のこもらせ給ひかゝりて
天ろろともいへり 宮神(サイシヨ)を弓六張(チヤウ)を双て絃をうちならし
らせられし和琴と云物を造出(ツクリ)しけると也今乃世まで巫(カンナキ)
のはらするとて弓の絃をうつ事あるハこれよりはじまれりこれこ
れるまやふんのつりさハ男の官をも圖書寮(ヅシヨレウ)と云女
房(ニヨウ)をも云司と云和琴を云司ハ女房のつかさやとなり
名を治たりしと云又拂月(ハチアイ)或を空多法師なと和琴の名
曲也教坊より出されし器なるによりていつれの楽
器よりも上手との事と承りけれハ是を
摘のれややするともいへる試詞を内のれども乃琴の
上手なる也といへるそへ也なり

れやかし 真実(シンジツ)れやまりハ別なと給ふ也
て押しますなれ 上手を手を精明(シヤウメイ)すや
ぴとぴぴぴびぴぴぴう ことけいかとふなく イヤ
らりくしまなと也 花の委を云行やも不忘しとて
なく被為済り用也
ぬ丈川 ぬさ河のせくれやりし手枕はしのふやう
被をなくてれやかくる佐ら 一 催馬楽 下略
やりしたと手枕すれ是曲と付時ハ手まてしうてふるゝ
事あく
れやさくらハ 源の内を引きて色々と給ふと又源を出の
れ座れやうまめ給ればして さけ給ふと云家説

源乃めうちわらひてやむことめ沙汰するや
ちうぶまん　唐の書をを相支憐あくまをお支意とおむ
を同氏れたとと成思とよ海ぶくにちりてなりあハをむ
してひくへしといあり
おもなくて　ちつのをとをもとるを
おりをひき　源ろ引ぶくへと　玉光経
ひうなる風乃　面白詞とや　玉経
みをかとうぬ　源地春人のこときいあくへ人を琴を
なんと玉のつれなれ紀成倉てなり
いとむやまを　今取琴度思ふや
世もいと作ひるる天　玉光事と面へ経弦度となり

我を人も不定世界ろうや
つふへを　をく求こ乃巻ようをを語ひをなり
ぶてをこの方　野天宮の合判方　吹
れをれとことなつのをき義の父成ろうひとをけろ霞ろ
ちうれ　山ろつ乃ろをれ初の意の心なるへしりをれ
ろ天れをを玉を内へ足ををらを夕新のるふれた
まふへ天となり
あのをれ夕奥乃上義ふ親をよの玉つろをさろと
れ海をろをくなり
海中をを　拍子乃まを面ことをるをあくふあめてどき
ふふゆへるや　たをち福の親れをふの玉ゆをを

いつせくもあるうへもふあしまて　又うちこれ所
たゝ我心くるしきとなり
山かけの方　玉乃心よりもせれの気ふまて勇もたゝ行
只軍勢(タイメン)の度と也　母乃事と下句まて早(ヒケ)下していや
しき気力の母まてをとるを
こゝろまつうて　引所来て去なりあくをこゝろ
うしなり
さえへ気　又くの次をてれば又なり
おそかくあひなき　玉とあるをへむの色ひるく
やーきとなり
春乃うへ　玉と我りのけてもなほとうをたかう
あくーとるを
さてそのれとり　笠うり下れ和不是るくやいのくと也
人うりとなん　源乃心ゆうくとも玉ハ扱くに如し
あ事世上のたかうをとらんとなり
納をの　玉つれ二心る気うりも源乃心ゆかもかをを
をとらんとなり
いさなひとりて　あなたへ引とうまてを又世話意りて
こなうへを絶(ダエ)てん絶るうとやいふひなきおゆる
しをてんうとなりひてもとむなてゆれとわるなよ
を心得り　気
さるんや　白　さていふひなれなり

うるあるこれ　むも源乃行ると立てあをくしきるすを
るきとやうく思給ふなり
ゆを　ゆゝはるを
あゝ和うゝ　あゝをむころうとうそをとも
きこ世るれぬ　ゆれ世を云給をぬけとうゝるゝのゝ
発となり
とれつゝ図守　笑ちりしのうくともしれちんとも
いとれし紀ま奏乃好をなくをとうやおもてむきるゝ
すて思むみこハとるを
おりひ入るを　鏡波山をしけ山をけ山をけられと掛し入
まをさゝるゝきるとなり

いとけうゝぬ　双地
いよく　又いよくむゝるゝゝんとも　むとけと
をてハとのひなるし
むゝうま　双地　とゝく思給ふむをなり
このゆけのゆをもを　逢江をるを
とのゝく人　内大臣数の位内位ある男人を
かぎを　かれたるゝ云むを
源氏　源氏のゝひ給ひゝ成ゝこれなり
ゆゝ　内裏なり　ゝこそよう　源ゝこそ山の
ゆゝまゝむの事とをの事　給ふを
りゝきを給ふ　源を人れるハ数多ゝ行ゝあれむとも

あまたすそ引きもうつる　ひやうの事ども源氏のうつの
ひろはつ　内大乃おとゝ　ゆかりもとめんとあるまんなり
はとゝもこゝもなれ　ゆかりを有ぞとやり行へし
いそうれを　内大の詞
人くしの給ふ　今まで来ぬをさきもうゝしとうるさ
ゆかりもとめ　世上の人うけりさもわひし　ひせ文を
なるあこうの気
おもてもこゝさけふ　紫の服に涉子と平てゆ　代の度
おかしめさまんるうるさ　縁となり
今ひめ　ゆかりを
ちちの涉子ゆも　実れ宇人の子まそむをうゝんうとゆ

元服をん　きやうぶくのうぶぐとよむへし
別紙　迹不　殺人と　兵をきしてなり
ふとひめ　雲井なり
位ゆもうゝ　夕れ位あるのうそ後むこみと思ふゆ
くちいきう色ゆい　いとへ源のをゝ町へし　花をゆ
さんとなり
の所らうふ　雲井へ　又れとく
うゝ　いまゝ　ゆあるゆ
たゝち　福の親ゆうさめしうくれを指思ふ所乃ゆき
あそありけり
人くもちうく　女房乃ゆなり

心やもく　おすて
万町こめて　見字もこのる五空間にしてや
ゆとう　なるもむくやうにしてもこころもとく
しきこうや　陀羅尼(タラニ)ふる形をむすん弥いのくとや
あれてをなりへし
荒園を尋　を仁ひ　玄海をいてさつくことうれとも人
乃力りなやをとくふむたちりやさなくを力を洗(ラウ)
ゑをくくとなり
うたくの　いりもたちあふ人ふとをむ九
きさ紀くゑ　ぬ石嶋老也
とくくをゆへを　拾弥ゑを紙とくや

おなめくくくもなくとやおうめりん万神むと可記拾
あみさを　源乃うくくなれいとなり
たてくなひをうく　ひのひくかと必ゆなくひとうを
この老乃人と　ぬ石嶋老也
おなふやうに　ゑ弁　ゑうう色乃事う
ひ見くとふ　タれ試(マロミ)くとを海くとれ思をなすを紀(キ言)
ゑくうひさ海ふなとを色海へり
拾さくくに　弁へをのやり城云うさやうう心てなひ
ゑなくとなり　ねきくと城市のをきくゑん紙ゑをを
をなけこの毒となるを城
おなふふ海海九　タへゆるをくも思ふ色をうくとや

むかしをなほ事とも　ものがたれむ中
中くさ〳〵ひろうそ　ゆくとしのあさひはなのあるかも
ゆひてつひにはてをきしるしかなこつの〳〵をとなり
大文字をもの事とかきへり
あのかれたい　近江表
如淨　あれてん
ひろれたるの　おなつかくさとのみむなり
ひとさいふはつかるや紙遠うあ遠　歌ハ可陸とや
老ゝへて　年をを如身なとに吳ゝさせ紙へとすると
なをうひとさゝとと乃　如淨詞外あ〳〵ハあ〳〵やや
中ねるとの　指なとの〳〵てとくしくれもう遠

——れお遠とをとや　たへをを　不堅とそうや
うゝをゝやの〳〵まよや　あををとるをあるほくま
さて近江表をむのゆゝるとるを
ゝやの〳〵ハ　ゝとくしくゝ文むの不靜紙元
これはあるさ海　如淨れは歌といゝり
梅花の朝朗乃梅となるり
すをゝる　はさひゝる紙や
ゝゝ表を紙へ海　まゝいゝ〇とかこゝむ物の花とそ我
もれゝ〳〵とれをてなるむ遠
中ねのゝとさゝへと　嫡子まくれとれくしれう
ゝゝへとむるのきと云討元　指芋芋恵——て鼎——

ふとなり

すえたのく　はちのなるていなり

又せち　雑ともなり

せうさいく　勝さい又小月のあひてのるれを小月や

吉ぐれ　吉利

えとめとものえ　北軍してをえとふてし

ふのをしやく　めれのをしー　球こふむなり

大月をとえしやなひてれ又節の沙汰

とうとひねを　今世行すてをてるとうやや

中ふ　さくまつれ中うれりひをありなりうち

なるとのりさくもあるうれ

あさ夏を　あられしるしの

えちくのふ　去渡へちのれむれ　又ひさいれひきくむ

もあるて

つくのろげ　はをのろき人をのくちもすくれたろとを

むやさつくもなれとをむなるて

うくみろ　内のはむまりの形を思ふ合て日の沙をく

せとをしーふへり

のくて猶し　初ハはそきふひーの今詞をりけふへり

てうくぬ　双ふれるするををきり　けるみにちのく

はのみうちのくつくふ人るまとなり

なへてのはのうまつりべ　あへてのこそ長郎ろう正反

してそくりのるれとひとなり
まして　ヨの娘ねとくてなり
ほうきとくーを　近江詞
ほうこ　大壺　延喜式　秋文武ゑ　大壺一合と云る
今聚小使ゑ乃事ーの法宝をおゝとよむ事ー
孝うぞん　孝こせんのゑ　ゑ　ゑ　ゑ
れごめい　委実人とする
吉のな上　吉乃ぬ武ゑ付さるとなり
めうほうし　ぬ法る　左注別
たうびーゑひーや　大徳うゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑとする　けうやうハ毋れ行うゑ　ゑ　ゑ　ゑ

しを　後養乃ゑさしゑ　大法へ　ゑ　ゑ　ゑ
大法を孝養ゑも可能ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
ゑそのつ尺れむゑ　あんをのと法ゑ
大法ゑーゑのやうをたるゑとなり
若得盲人聾盲瘖瘂　謗新経者獲罪如此　法華
大ぞう　大象
こふゑーゑ　内大乃法ゑ　法ゑ　ゑ　ゑ
法ゑ　迹とする
ゑてもゑぬてし　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
水城くゑたきしを
揵椎　云　揉菓汲多　揵新設食　法花経をする

そしることハ諸こをなつを水くみ汲の面をそそしし
あ人猶ゝ　法師のあくるもとる曲事と仕給也
はあごとよ　ぬれるゝ　ふなり
よ法し此日　ゝを個撰日不及乱
おみ〜ろき　内乃史代乃ちろきゆも四位又位俗ぶまと也
ちけゝ　あゆそたをする　近江のよるをとくくく
て不似相と云こ　又昔の歌
逢つれ天　又節成さして　を江討なり
ろかれゝる
ちひるひ　先より猶経の宗ふ批判をり
となる事るゝめをを討うゝをゆ人れを面白

まや回数理を縁尺ゝよるへ気め
弾づのひ　おなをにゝうて変ゝなり
討だひて　討迫
ひとゝふゝひ　奇乃ことを作く要ゝとゝる
こ喪おかせ　おふくふれゆめ西をいゆくとや
よさるまゝてん　やゝく所ゝんとなり
れとゝ乃を下よ　天下一よを江天を忘れた兄弟京ふ亟
思されてはとや下ゆ討なとめ紀ゝをたてゝすんやい
ゆ〜の人ゝ人ゝ　ひを形ゝと英遠れまゝのゝれ
ゝゝあふゝのゝさ
ゝけあむはゝゝ　ゝよゝゝう多猪ゝの近ゝれと語ゝれ

こその図をすへゝん

たゝねとも　たゝ孫ゝ武蔵野とつゝくのこれぬう

やそうさ紫乃ゆく

てんうらゐ　葉隠や　久乃うゝまを

いやふう　にくしのこまする岡の浦乃振蕩乃いとふま

きゆる猶うそきまる

水無瀬川　あゝそとなとゝきさ海ゝまこれせ河邊乃

みなのすゝねゝも

多勢に無事とゝ云なるへし　近江系をあすゝ見そや

紫式部　近江系の　紫式部一説やひさちの海れい

ゝしてたうの浦波乃立いてんとゝ人海仏計の

隠岐なる田子乃浦波うゝぬ日ハあませ系とこひぬ日

もなし　如此詞計ゝや

たゝ川水　三石野の大川　ゝ人乃教ゐみのなこにおも

ゝ我忘ものやそ　の人ゝ成水ゝ川の色ゝるうや

たゝゝなのに　たゝもゝゝる岡心乱まへゝ如注葉隠れ忘

なと長くゝたるなりうれるもてんハあるし

花多ゝ委ゝ　ひさゝゝ色筆塚あるし

ゆへそのゝ　ゆへくゝたゝ海ゝつゝゝ系ゝ

ひもゝ　下女女の役や　見世呼直仕合を可笑とゝ

ほうゝりゝハ　なそゝ来ゝほうゝ　俳諧ゆゝ志ゝあり

見ゝゝらゝゝゝや　如法没法間水及ゝやゝんとなり

云乃りし事を分別とう為て
地事所〳〵 地ゆへ〳〵〳〵すきい所〳〵やゆは
駆ハ地すきゝ〳〵中納言のきこと拵るを
拵りき事の 中納言を地るを 鉤書(カギカキ)となり
きんじの云 位ゆ乃拵まく生あ〳〵〳〵んとるを
ちうれたる〳〵 又徑地 荒墻(ヒヒロ)の黄瓦
ひゝちなる云 四ケ國乃品所なり
万条ゆも生仙所ハ一弾あり但し一弾ゆも一ハ所なき
ゝ色〳〵山云ゆも出ゝと云ひとゝあを
されをさうん人きゝたらんん人きゆはのはゝうゝとを
拵りみまゝとなり

一 ゝ拵ゝみて 越地地
拵ゝみて を江
まつとの拵へを を江を出よと云詞をゝ変不云して拵
とあるゆゝうを祝(ヒロ)ハして やひ人徑の拡(キヤウ)云ゆ出り
拵たいめん 對面(タイメン)の時ゝ一ゆるゆあ〳〵んと改ゝ
云詞 一 ゝ

舞史　並又

討　并ある寒ゐ源世ゑ扶の初れ事なり

おいいの　肉や

ふとさるの　うとほうひ乃心なり

ひとうてうこつ者とうてもの

りのめ　義ひさうう義ー行ーうへとうり

人みるまくての義るや世上ゐ面事そ三感ゐー

名生之源家うこめくときてめされすゑ法へあつけ

行ふるなと曲事よや人みるまーるそぬる物と

せうとほうれるまくー義ー てとなり

者ようくうれやと変なうーも句

乃心中也　なの親なれやもとなり

お近も　源と内とのゆ心と巡へ中也

にくゑ行ひ心を　源の好変ると

ゆうきゆ心のと　源れ恐ふと又第乃ゆうーろみなる

をし

せうう変を　神風のもくーをみけを拭せあの心れまそ

のうーうさひーえ

ゆくと　和琴也

いりのむゆの　夕月秋面白ゆ分なり

うーれたくひ　玉の弾　又源を扶

わうりゆうん　ゆ海あーーんとなり

太遊　雅ともなり

やうと水のかとり　めうと火を燒あつうして　燒事火

とやうく水うそ清さんまくうかゆるなり

うちまつ　うまよ者へくともすあ付ゆ物れや

爰れ月なき　清墨（サンシヨ）の時分を家と云なくるる

めくり火者　源

ゆすうなくても　爰なれも者にふをゆ系めやうを火の

いのまて我分ともうせん　ドにもこぬをくる

きとやいのまてドをものくるまくなんとか者

城用くるひの　私

もり系なれ　火乃者うくるを火ハ燒（ケウリ）させをなうてきゆる

なくうあくふ燒（ケウリ）とかくとうあるを人乃あやくくをよ

へ丈ふとなり

くをや　ひとうを活ゆうり　ゆくへとなり

ひんの　長歌乃めをや

ひんとふ系ゆう　ゆ吹なりたうとなり　けいこと成

りくうを云ひの

はせうをこ　指へタと弁出ゆる三人なり

風の音　源討　次討　鼓（バンキ）清云と

はくとひ系　和琴

源中ゆ　箏（コト）と弦（ゲン）度を吹清人り

いくうたてうなり　及中うくをひとるを

すくせ　わうう秋也　様々の虫成るたとへなる

寛平法紀　寛平二年　平の利世若皇王二世の孫富士

の宮也　両拝長殿宮物語秋虫嘯聚る親聴曲調宛如松風

の勤腹鼓奏響不聴而今舞手得舞数千物并綾羅衣裳

不及言

むしてと白

色いろ乃ひてる　ふひ乃ひとつとも酒乃と

てゐいなさすらうあにたものめやを

玉鬘の事　ともや兄弟達の絶出ずふと云心なり

ひれを嫌忘も表とも折るるり

さまあくれと　孫のそしさむ也　寒さく兄弟と別し

へのとまひる後へし

ひるふ　ひうふふとや　ふとをぬハ兄弟乃絶たとなり

元恋ひ　むと拍の思ひ也

さ海うくをてす　歌中たまのまうる弥なり

当馬相撲の事を引て草文恋の心を元　うと文恋

秋おのもとへのうひけるなめ　をあるうやく

むをとてしても来引やもり

野分　竪並六　源世六歳

詞の寒の　八月之ころ也

文芳　文くれなるの

くろぎ　あのき　はぬ乃末を黒木うしむきくるをし赤木

也　牡鹿末

まち乃山　万葉第一のよろ引

櫨春山万葉之艶秋山の業之教　時客国王の判之

冬こそりまちれくれなのさるを色を焼ぬ所りさ

ま一花もさかれし　下略

春秋のあらそひ　引歌多之略し

秋を思ひ乱て分うるの時のつ事作くうつ乱むハ

あらそひ　あらそひ　あらそひのつくるむ也　芸上乃れまんなり

あせんぐさ　中文の文院なるてし

聖ふ迎の年うり

杜行の八月秋高風怒號　宣元ハ古撥也墨時を張むる

野分と出するはあるの所の一説也のの

をめされ　し君今又あまを重ねをなけまは聖分に與

とうなひし　拾ろうを乱事　種種気像也

世上又天道可重

まて苦むの乱　中文を乱歌詠人里

古今行恒云　むのとけてあれちし

ちぬへ乃ら　仕たるむ乱又死狂とむこそくあるこ乱むも

れかのはりの　大きなあらふるまの神をうれ春峡
　花と風うしまのきし
なかあしの　文城野れなかあしのわ兵衛とかきも風と行こ
　と云城ようまて　ちもあしの揺ともあしの乃なかあしま
　むなるへし　せうしくの風城こ来てまてとなり
れとくさ姫表　ぬる姫表乃海のうこに源氏流を時かも
　中ねる表　夕旁
こ所うー　つまと　庭なと城色こて〻達ふとうれる
　なり上城さ海にするようてかそくこと城するの
　強を上字表
ものふまれ所　人よぬけ出ふる心なり色

うもさくく　右今にのふを揺乃事ようや
　うもあうもの文なを　ふ揺をいふなり一重城と云ふ
ようひちりて　のふふこなるくやうとるを
ゆうにけう　をちくもうもむるや　浅惟犀
　さい町く城するや未子なやをく城りうや
町くみる人　紫上ををさくに行もりをてうこをふ
　のをはふ別のーあくてとなり
西乃はのく　ぬるもりなり
ゆくうて　源討
ものきあて　紫へ源氏るやーん紫や
たてる所　夕の海重ある所あくなり

おかせりける　雲と夕つゆのよう汚ふことなりけるもの

風こそ　けはいこそ

史記云

於是太風疾雨和起而木發屋揚沙石雷雨晦冥

ひとしきりして白めいらーと夕れむなり

三条乃文こう　大文れいこうにとること

可つとゆるける　大文ーちゃうとなり

おりひ行へゆつりて　大文へ源れ沙云侍なり

三條文と

九条太盞相遣識記　九州ニ落患ヒと必可鶏ニ報親義ニハ

命障若ニ清恩可向報本之寄者

又ハ大風疾雨雷鳴地揺水史之変怪之時ニ猶親次系

為

礼記世子三季初日ニ三度鶏鳴午時音　文王と武王

ぬしと也

れとれれりゝ　大文の討　殿ゐ也　治設の事感ー

三所八句　風翻碧石瓦　函顔墻

ゆゝくゝゝゝ　大文の為となり治い説入うと

らさきもなり

ひうりけて　おうう雲とめとゐ所ひてあるまー記と

ひなりゝ顧也

きーうゝ　雲上垂れとなり

たゝーゐ　花ゐを秋ゐ也

人うゝれ　夕ハ実法師ハ嵯峨上を思事をふあそぬるこゝを
おりひけくさやうなるん人をうれとるや　花法師不二
船をを思ひうをふるなり
人くうゝおそ〳〵ます　れきくの時さよ文つのさかと
ある廣中に花散時さ人也といをんたあ元
初ひくゝれる　芝波みゝうゝなり
おちごゝして　おちあゝしてとるを
きゝみのゝ　きゝあ初ぬむなゝし
あゝれる時うゝん　そのとゝを城いゝり
いゝ〳〵へふ　是源氏物語　源氏乃あゝまゝなやなり
ゆるひなれ　をゝもを文中となり

みのゝ　肉へ一号引ゝを今乃世上代ゝをうゝまり
たのをうれ文　文代源へ肉の沸沢巻のゝ代話一事
ゝうきうゝめ夕乃おゝくいふゝう源を代話る
れ初ゝを時さ　男くゝれゝる
海ゝとにゝみて　ゝ実急切ゝる代となり
うゝさなゝ　うゝ分ゝ　ゝふゝ　むゝ代多人とゝる
時ゝ歌也　祝ゝ大やうなるの歌となゝし
れゝるとあひて　聖ふゝ風氣殺たゝるとなり
時うゝんにをゝのゝ　ゝ文女房所や
ををんなゝこ　時うゝあひゝる装束の文ゝやうゝや
けゝるハ肉後代衣裳なり

とうれ面ー　面たて弟ゆき　黄也うー　崩黄

ふとよ　話は日ちくうの兵よことふ　吳女

山路不安とみてそくの明石志をよなと童の装束の多

まや　庭乃花の香ろ　焼物のかりあひうる所為

中文乃遊風もうを文つくめとなり

ことぐよとあろ時を鶯よ装束のかりあひうると可心

松の風不安波也く

あれぶひ　あくうてを内るまひ拍也　時

れとろさのかろハ　ふくくとをなり

伊勢乃ほと　夕旁の殿上童すくへ内乃時山女房衣足

ふて世間心也ぶうもなりとなり

宴おの石　夕旁の紅の袖強する

あまいろく　牧中文乃世上乃袖おもくき時分の又装

上を忘ゆもあくすタのひも面乃れとくに思ひれと

一ふひふさいへと中文はけうふとろや

あくき風をる　内く源指対いくき走ろと也又夕志

てとひ沿ふになくはめたろと中文乃は恋ふや

あくふ　やうそうろうきとひ心の

あやしくろ　源氏をとろうの水れかめさんとてるを

ふうくれいを　源中文へなり

むをつぶくとなろ　胸れふさの沿拍なろの感字よや

中ねの　源堂へ拍なるを

心はやさう　人乃親は心を富まわ〜ねとも子とをゝ
道よ海うひわろうれ
月の光のか　双
文う　中文へたと　源氏
密〜き作文　さきう文こし文心あうとなり
心乃文は色地あ心ろうや
心と記　源の中ね縁入ておそ〜ますを利根ちみやうて
清すひうやうなり
みをはうう　中文乃は方なり
はうのこと　源氏言と恨うる心なり
こうき　うけうをとりたてなり

いと　かめうう心なり
大うくうき　勝く野分をいとすて大うくうさ
をとやかりひあう対分るれを去りされ引へとうや
あざく　けさやのなる心なり
あくうれ形まりを　玉乃風やもはうれ度となり
源氏好文をもつうくおりひ行へれるや
はうばき　一名　浦神楽　和名保く弟波
玉乃かけく作文のやうなり
わらうふ　英寒ふもあり　和字にこやうる除心なり
春うん　新文
いとあアやあふ　源乃玉へ相撲を行ふとゆ物なり

いとなんくゝ　あゝをてまをもゝ心なり
をせゝもゝをれき　てうさくなゝぬハ心あり　ゆるや宜也
くりとるを　あゝろをもつりを双る
八重山吹　玉を山吹繋ハりを様をねくるをまもむへ山
ゆをなり
れをうあをぬ　れるをなり
花を　偽楚をけゝをむをれをれゝををり元
いゝあゝんを先立て　源氏伊とををゝ文まめ
ゝをて玉ゝを玉れとを夕妻ん語へを
吹みゝ伊音　玉也
をゝくも　夕れゝさへ玉の音恨ゝ音也

源の吟に学ゆるなり
下ゝ音　源なひき活ゝあゝくゝを風をふゝとや
ふよ行を　をひくふゝをてれまをるを
ひゝをみにや　夕のゝを意心なり
きゝくもゝすを　たゝゝゆも音也
かゝひ活ゝく　綿をけてれぬり揃なり
れゝを　紅のゝを袴也　あやなをを
中将下襲り　禁中の法第乃英れ裏をゝをゝさを
元ほを歴く式をゝを
けゝん意う　花文綾　花乃文ゝをゝる綾元
謝恵連云　客途遠方意遣我鶴文綾今日心元　元

はなのえとを略歌曰　月夢うつ衣ハきんを比毛ゑくく漆
ゆゑ
ゆへし　年一数度を赤花と白花と二あり　老てハ
黄源のうすくて赤色交色のうつされとなり
漆色黒くなるなりや
うつ海かし紀　雲かすん聖ふふことつ面なり
姫恋の沢明さ　夕ぬ石へ沢出なり
きうさあなふふ　姫恋雲乃うつうまうまなり
文のかたを　夕討　三条文
うん白　ひいなの殿を聖ふるをいのことなり
ほくくしくこそ　れうろうきむうや
ふかの　私乃祝をとなり

みつーおうつて　姫恋乃海米紙を出さり
かれたくく乃　しけ姫恋ゑ（キサキ）ひまてあるを今ふ心ゑう
但ぬ石上の殿なまたあまてさ海てしまーをとや
ちうきりて　双儒若ふて筆なこん合まてさ可強なり
ふは定（サメ）てこをくーしゑうや
風ちうきふ　夕しふ拝なり
うこたく少ね　相建あり姫ゑ人まて必紙（スカミノイロ）ーたる花
うふ付うとなり
ちをあり　色差　夕をさ花乃分別をるゑとや早（ヒゲ）トや
いけくのおくおさやうの花をあるやーん不ふとや
花宮お遠　いけくのなる花ふ可貧もちりくふ不ふん

ちうすんと養ひ給ふ

ひやうのへくゆも　夕ゝ女房衆詞をかくれともとす

くなにてきのこゝろ好きさしをとるを

又もつい沿ふて　一番をへ一番組まてもなり

馬乃すけ　夕房れ沿ふを

わさらせ給ふて　ゆゑ姫君嘗をこるこへなり

見沿る武乃かゆ　嘗ハ掬玉を山吹夕思ひ給へり

うと父　嘗のうす文なり

さをあらぬへき　嘗姫君なく夕朝夕見給ふへ文事歌

れと源のむとき給ふとなり

をと父　如はおて独ねれてゆまや　三条文　感なる玉

や嘗乃めくをる給やうゆをを紀とをを

姫君と　文詞　玉を也

くらゆう　夕ゝ色りさ迷さるのは檜となり

れむとけを　夕ゝ内れむとけぬや

むうをて　大文のあくろなり

姫でう　不縄　逝江君事や

むをめといふあり　内の姫とりひてはとなり

姫と大文を給ふれの一段外文めいヨくとなり

ちや　行乃巻れをは　嘗武歌自作なるぬらし城

ひらむ深しく

みゆき　行幸とは名づけ書

いにしへの寒の水　源氏六条院　翌年二月まで　事この

意よりあり　竪並　初音　撰もち　文元

天子乃き行幸　院ハ法皇也　天子なれども　法皇

所ゝ　幸あると云義あの字を用

ひくおかしいとらん　むの法を退　なり

うのをとな　いりていりのようとんをれ山のう

色ゝられ行る音なれ　ひ　ゝ　叶ゐ

ゝれ元ゝ　こゝ乃者る紫上むと源のさ行

をれたゝ色しやひむを　ひ　る　なり

うのれとく　後仕乃法行事　ひむを行事　きゝ　くしやみと

つまうゝしきゝ元ゝ元ゝとゝや

あさやのなり　源のむを　なんとゝれやれ　めすひ

もなく　奚乃　おやとゝ　ハ　ひ　ハ　ゝ

ゝゝんとゝる

時ゝひむを　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　源の　ゝ

けゝやゝふゝゝ　行　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ元ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

大原野の行幸　野行幸

長元年十二月又日　大原野行幸　所ゝ　損　ゝ

行幸　委略之　山吹　初上洛興

すゝゝゝ　西朱雀也

馬ぐひ　たきぎ　せんたくを擂そろへ事

三大臣位まうれ　もそ下さ当位まなりへし

記主例ハ延宝六年十二月又日

あと又乃うへ乃きね　ぎまるを正用安や一日の外擂乃時今

も能人是用るや主上さ赤又なる事

主上赤又の袍ハ是ハ　行ち外さ赤又乃鞠腰袍下襲さ

蒲萄染　色さ書と作るを人乃出法や

ちひ染　うを紫なり

うるはしきつつひ　李部王記

書記親王ハ是ハ擂布む及袴或ハ用ハ紫末蘭地又綾袴

小襖子　絹袋　元下略襖下襲冠表袈白布ハ用ハ

小ちく擂るを　やさしきものうへにむのり紅ゆて

なとをを　時

元ちさ　話ち　うを　そ元さ　話濃や

六府ハ六衆門　左衆門ハ　ちをなやそうや

と衆の書飼さまてとなりうを元を回る事

昌泰元承保三年ハ記せ家花ち柔略や昌泰交野行

幸左方鞠記ハ著赤白擂地擂衣ハ方鞠記ハ是ハ白擂地

擂衣ト云ハ　承保大井川鞠記ハ人書飼ハ人陪ハ寒ハ

書飼ハ方ハ人錦帽子　指袴服綾絹袋具犬飼着帽子

赤擂ハ黄柳と茜とハく擂ハるうを衣や

白擂ハ又刈安と紫とて擂ハる指衣ハる

袴をきぬ乃さしぬきを乃帯奏纓の冠緌を庇鞘 唐錦
掾腦と云こ 書紀に装束不日文くなり
見よ記 猶乃車乃編るなり
うえて 吹井国官人として紀章の呵先よりて掾なし
かくるも 掾川小掾とわこをり 鮮呂桑馬浪浮掾
方舟為梁其上施板 以色して儀式あるなり
みのとのあの文 立上茶文まへう注を
ひつ米一を茶文めさるく也 源氏今日他なくそあ
のりろなるへし 鮮呂今日書文麹塵なり
かきらありの 殺仕のれとくくへ人をを 乃の心
法あれ内 昌泰車中となり

女御膳夫類或出雲方或三宝国云こ 史記紀を記
なりひな 南乃と思ひなれるや
たくく中將 源と女房となり
同しやうなるとおもひ小天子ゴ鞠して仕さを所
らめとなり
太大臣 西文称云 乃つ如湯麻呂号能 又如例
大臣大臣を侍ものもくく也大納云ハ叡とそふ
をを 大臣と納をを乃の差あり難を自分也大臣を
花やのなること成たり乃なり 年くあても肩と造
なるへし
いくくうをくうび 難を大臣 冊余

眉とうくをとりまとめ女乃まゆをまゆ墨にて女を
一時さうりんとなり
見れとも新しく　其の見れやうにて
新しきかたの落ち　其と交ぜつへうりとなる
されくれ　好みとて城を清門のうつのうつの度
思ひ付き　内海乃うミ水と源氏絵をしとなり
海ちうとも　北直衣也
紫米ぬれ　ぬれゆるるや　天子入野行ひて故物むの
例もあり　著物法度　垂衣乃例をあるべ
六條院より　延長六年代例をうつをり時六条院ハ宇
多法門今相続ゆもをれ法うおれ　李記云六条院

被賞酒二荷炭二荷火炉一具
ふつのうまつらせ　ひりまて　双地
回ふ延色四和野行幸也回用指足不宗来刻上還御悪
と云ふ　上下略之
くくの人乃衣乃門ふう　延色四年小野行幸時義人衣乃
門源俊春と海俊ふく　雑一枝中文へまらせたりとり
ふ例乃心なり
紫ふ七尺又す蕾ゆ指木ふりを染せふくゆ也と名付
の紫といつり或ハ紫を用とり色花を掃秋を紫ふ
付るゆ者やうつをを鉄漬ゆ付なり
何とうや　双地付るゆを業乃せりゆを言ふりなり

雪のさゝ　ゆるき法とゝを延喜帝聖行幸ありしかぬ事也

御門の法製

太政大臣　ゑと釈をもち太政大臣まうとゝも位をあらん

こと成ひにやしらうとあるもん句

さゝれとゝやよむへし

仁和二年　昭宣公れ例とおもうしめをなり源氏も此

関太政大臣　昭宣公ハ位なり

〜か山ゑ　大原やゝ〜かの山乃小松りゝやまさる

うれ代のうけみん

ゝふ位なゝゝゆきゝあゝゝと也　右近とゝを太政大臣位

ゆ〜ゝふゝと成の法へり　右近と法せいゝゝゝ行

色ゑゆへきふのやうなるゝあゝゝやなゝ

そのゝほひ　ゆゝゝやと花よりゝゝ首をるや早下ゝゝ

の事をおほし　文門の色のゝ

ゝゝゝきゝ〜　玉へ源の文をゝ法色ゝ

ありひなのゝとや　あゝゝくゝゝゝゝ　みて天子へ山の

ゝんをやゝゝ源氏ゝの山と法推量と玉乃山色ゝ

ゝゝきゝ〜ゝゝ　おきゝ〜者ハゝゝ法ゝゝのをゝふ我家

のゝゝゝゝのなく　今来おきゝ〜ゝ行者ゝや

者ゝゝゝゝゝゝゝ法者と行幸とゝゝゝくゝゝゝ

ゝゝゝゝ源雪ふ天子の新ゝゝゝくゝゝゝ

玉ゝゝのほゝ面白く

おなじうなれど清みあり　文つの色乃事なるべし　玉い
のことなり
うへを見るか　紫上なり
ものくゝまきさゝれて　はじ同るのすと云心の
あゝなるゝ乃おもて　玉の源乃君みれなるくハ四位の
のこれ海のうちもんを中文乃君ひひんなゝとなる
わらゝ人乃　何れ要分別つゝふまつりたらんとなる
ふりゝんを白
あなうゝて　紫乃詞
いてうこゝを　源詞紫りとなり
あのねさす　源

元服ありまさゝ出る宮まいりつれの沼の宴はゝへ
月とさらゝを月ゝ雪ゝ　雪ゝ沼心なり
物おもはし　宴乃色をとる
清をきのこと　玉乃や　男を元服(ゲンブク)女を髪なり
よなをく　此者に二あり　女清くゝ心りて安定をこと乃外
やういくゝ　えのとうふ素性(スセウ)心となる色
二月よりく　清をきのる　冬れゝ　めす心なり
女を文あしたれく　名とあゝハ中て不許時分も人乃君
ひをめとそこりれたまする清くを　白　氏祭れつて
めもきをへゝ　源乃君ふれ分なり
あのりれりゝる　玉ゝの文清ゝへの事なり

ぜんとあるこころをもてハ民部ハつとめなくてを
と〻菊氏嫡家すてれ〻まをを春日ぬ部ハ心ろ
たりひるん部にとなり
作部るを　ちくハ作ろを云事ハかくれあ〻となり
かをくくれ　年人ろうたれやなとを今をうとてを
部ぬるれとなり
この沸あ〻ゆひ　勝ゆ元を男女不限ぬ不思ハ秋好を
を内府着袴年〻数を二戈を以後を不定勝ゆひを思ふ
〻ハやなとふ心なり
心のをなく　ほなれ心るを
文もうせ　みりの服あ〻へし

ろうをれ〻　源討沸煩さ部るを戈となり
なふ〻乃あろうん　夕寄
うちなをろうを　禁中なり
うぬくくよろあく　あくハけとのや
れくしき　をろのなる心るを
部ハけろなるを
年乃ハをろ　火字乃討
ゆへき　さんともよむ〻　菱上や
人のうへ　多若多厚　人の上をく云〻となり
いてをち　後世へのをなり
されをとをもなり　老をれなるひとるを

日ごとにくるしき　御瘧氣（ヒヤウキ）を毎日とひ給ふのくなり
大やけじとのたまはれけるや　関白殿と大臣討而白地（キンタウ）也
いまさき／＼なく　朝夕のおほひきをさる城引なれ
してちかくとまる
拙し給ふまとたてさる所　大宮ちかく細（サイ）く夕乃事給ふと也
おわらひて　源
いふりひうすれは　いとけなきとちかはゆるしてとなり
あくかれ人　源も詞をまをひへせまる
くい思　源の給ふしも今を後悔（コウクワイ）となり
すい　洗濯（センダク）れむ気上下きらめとあるに水の際（タヘ）なり
おさまの末は　濁惡（ジョクアク）世といへり　雲井路のるすなり

皆世上乗世にて零落（レイラク）と也　世の末にてちとまれらの
すこしもあかり留とる事し
汚れその　我仕れ志給ちん人まとなる
ふい　不意也
その折ハ　我仕の御娘を不審して打色とまさる御（ミキリ）す
さぬ物もあやうしと也　あなかちに雑（ザウ）よる可為事しなれ
とも女子もくらかなきとみて今まて世ひとなり
めしとまくる何かそくらうしや仏給ふ可解也
むつひも　女子なれるむけひめ人ゆへ物ひなりつ年
月ごとくし給て色しとなり
女宮なさも　内侍（ナイシ）下すて乃女御（ニヨウゴ）なり

こちらのもの　右京れ肉倍のすけ二人あり
又所〳〵でも肉倍殿の方もむ人あるとも　尚倍延喜式云
肉倍肉一百十人尚倍二人典倍二人葦倍四人女孺一百
人余〳〵略之以上百八人と心得て可強
れ以人たり〳〵　家たる者て文盲のものを心よへてある
ものとして撰織して私の家ゆくさ乃〳〵卒生八倍
倍もそ織なる者一志のを引の家乃ことはりをね
をと撰ふふとなり
所〳〵あれとも　戈受を達しまを以へり
らになり乃なり　なを云れらゝおきてひてをけをの
をになるまやうれをるれと撰ふふをまを

文ふふをさまへ文すち　さもくるれるを文つの色を
うるまを思ひなり所事をを元
なをやけざ為まて　文ふふうへまを私うり忘を出りこ
そなをまをれる云肉倍れのうの乃織はりにあり〳〵あり
新をかろ〳〵紀るや又ふれとも人うみもうる
うとなり
ふとろ又をを　ふれと倍る人の子りちる人をさも
なくてをとなり
ようひの祖なと　亞れ年数と為るうのたり孫ふふ
ちれ嫁とをを
清ふやこに　大文の清物所殺仕法　おきとなり

いうかく　大文字御詞

はなはだ　源氏懐(レンミン)ノ心あるゝと年はせ及てとや祝(ホク)ゝ左文

はなはだ可笑　大文ノ詞　源氏のこちらゝ不審(フシン)とや

年はせ及ぶるとあるゝとうるを

はれやう白ゝとや　文の詞は源氏心やあのさんはい

ゝ源へ出れ来はひ事きくゝ文となり

はゝ様なやも　仏様(グブ)方とをてなり又れまりなをや

まうちきを　儀式(ギシキ)　御家礼(ケライ)なとなり

六条ノれとゝ　文云なり

つれなくてかりひいゝまね　夕のひるへぬをなり

人のはゝとゝ　云うなり

ゝ御をも白　はゝとゝ合(ヒ)て参(マイ)ハとなり

ゝをあゝんと　なひきやせまゝ又やすゝをれゝ白ノ

れとゝのはゝあやにくなると　双はや

たうとく　首濃

あ白まひ　お祝(ホウ)なり

御さゝ物文様の下のさね　直衣(ナホシ)　内これ対なり

夏を練(ネリ)ものを白あ色のたゝら　袷を馬光(ハリ)濃　布袴(ホウコ)

尻長(シリナガ)　様(ヤウ)なるものなを

様ノ下襲(シタガサネ)　面白くうゝ色ひ深なり

さゝのゝ乃き　唐綾(カラアヤ)や　帆布袴(ホフ)ニ

今やう文御そ　はゝ乃きぬや下襲とをみしを

をこうの海さるを行へ白　かくたくうを内府に事するを
義大納言をもつて乃大臣　大臣は法子内大臣の外甥長上の
兄弟なり
法子十人あまを　舟友なをまをを
猶のこりふ　大臣黒報者と世上を猶経にたつこれとを
法のうしや　うんたうのうちんとなり
勘と変定するかうんたうや曲るすくと勘心の
うんたうを　源氏討　夕とをとの事を切のめのーた
　　以前
著うり　源討
たいせう　をよむへし

もひとなしぬふ　白瞞のひあり
うちくれわるくしとふこ程ハ白　内とのとやめく
やれ恨をあるとうを
ふるくれ　あくをいきほひなり
内大臣ふくを天下成敗行ふ是ふるとくしきむなるへし
ひまをんくめ　首略してとなり
いけーへうけふ　後仕討
　　以中ふををーーのをを
　　内の法源法憐愍なとなり
たいくーを　あをまをきまを弱ふるとなり
それ仕をてを　出のをを後仕行るを
れをを　後仕

なかの　西園寺の殿の御子なり
きさき一人のすゑも　内大臣の位にて成てなり
うこくなり　近江、美濃、ものるや
姫君の法事を　叡山の御
きしにまされ　源氏法盛之
たかく　あか衣大文尼にてれいまゆへなり
中ねの　夕と宮ものるを不審祢
一ゆ　宮を敬一ゆ　一ゆ　一ゆ　と一ゆ　無曲思召して
源乃姫ゆ　ぬゆへなり
のれと　内ひしし　ひなり　双地
あうひも法とゆ　六条院へ後世法堂ゆうんを

逆ものとなり
きさきし一日　御物忌日　必来儀と法定なり
きゆ乃ゆこきわと内の御をゆれゆへゆ
又ゆうる所　関白を源の内ゆ　養ひ一百又何事一城の
中へくれ　白ゆ
ひうてゆきよう　玉城源のうくゆんとを法ひと内
氏法ひうなりひ法へを
氏ん　とうを　ゆうくく　紫宸石上なとゆを
うの法ゆうを　絶滅せ源氏なるをて成ようとなり
十六日　唐の必来日　如
かうの色　十六日を撰ゆ定あるうちゆこのゆ大

文治氣受可給なり

むへなりなり　聖分の表は源乃丞へたまれ給ひし

とタ乃のいはみて思ひ乃外ふ心ひ〜と様い外ふ心合

てむとなり

うのつれなし　恋恋乃也

ふとゝもあるす　一へのうゝち勝ふゝと云心なり

迷き〜くり紀　丞へ婚姻なるゝ〜きたれふゝるとゝ也

癡愚（シレ）愚（ブカ）なるゝ也〜しゝとなるゝ

孫ちけふる　丞と聞ひて又丞にむうつさんハとるゝ

明くてその日　治をきの日なり

御ふゝれをこ　櫛箱（クシハコ）大文（ダイブン）ふゝ給へり

きこゝんを　御文を

いかゝくゝ文　尼（アマ）ふれをなり

ふゝるなめし　食（イキ）なのきとゝるゝ

治ゝ〜きにきゝのひて　孫（ミコブン）ふゝを成給ふんとも御ふ〜

き次第とうやをあのひ中いかゝとうゝひてなり

二ゝふゝる方　丞を三条文乃治孫源氏のまてもふれまあ

ひゝ二明ゝとあそゝ〜ふゝ

いゝ〜や　いゝゝ〜やるゝ

ふゝを丞ふゝ〜を　丞ふゝ〜げ乃秀白（ビハク）ふゝとゝ也の人ふる方

の指ゝとめ〜〜ふゝやふ乃ふゝくゝひ心ゝへし

唐衣（カラコロモ）さ作ふ　ひ方乃へ秀白ゝふゝ様白（ビハク）ふゝ字ゝ也

はとゝゆるされたとかや

みゆきあり　髮あぶの奥やや

〻のたき畑　掃〻しの事うり事

唐〻り結て合加と又唐〻て合〻と儀也

ひんぬ〻乃ぬん　二条院の乃ぬ院

あとよ之のかそなり　服たなり〻ても用

服たなり〻ても用〻みひ文を画服なり

あらく〻とゝや　あれあの正名へ〻ほとよ深たる城

いふ色一袴栗文を袴の文と出出一〻

ひたせ乃ちう　うさねを行みもあ〻りのなり

今袴之事重れる城いつ〻り蒲たるゆへ古代むと

来摘ぬ〻乃〻

豈の〻〻きり　〻〻こきこみ〻〻むや　或説よりたと

落豈一深て上と紅まて深〻る文となり

〻〻せ紅へ文　文詞

れい〻の　双地　れとなりきと云むなり

なり　すち乃ゆ　唐むし城つ袴の文詞なり

ひの方こ也事　来摘

唐衣日も文事になる時ハうの色をくう人を色一さ

色りふう　色ものまと〻る色うなり

〻ぶうと　ひなの西年也　志のみ〻る心〻や

まて今を　伯徳吳黒〻〻や一〻る時ハ色ひ〻るさもき

しまいよくつまわたるひるまを
うう夜又うう むま 来揺うう 夜多敢又 此ひるまを行人り
天いと白ひやうふ 玉乃井
ろうしうう 朝晴れ白うなるとなり
ようなりと 唐夜討度と 双比るを
さしを いうまを行ふ心なる人となり
きしなやをあくい 比寒まを人いと業ふを
雲霧の義式白てのるまを
けふわさと 源れ源切を内の思ひなり
やうかりて 腸結る海いるを行人と我比姫をなり
又れ後世実文して稚と源乃比源切板のるをふるとや

いまをの行ふ 我仕城玉乃比左不へや
うちれれまし もきの在なるも
御ものの行ふら 実文なまをて出思ふ行ふるを
いふをゆくうう 傍なる心也不をと出を
引むをひ行ふ程 雲の腸なるり
元をのひ 夕乱のるゆくうや
いけへを海乃 夕良れ事を今東を祝ふなんを中
中行をあと 源氏也
人め城のをうを 夕乱のるゆ不義人めを怪てとなり
けふ行ふる ちうの討源乃比急切る行事を表となり
ううめやう 我仕 玉藻を雲や ひよふあるうて

ひめ君を　玉へ　彼仕方をうらうをたまへといさ所く
きーさふ色ふかけーをさて　源氏
らふへなる事　代ふるれを遣る玉うーに成てよみ給
ゐ乃ゐ給ものゐ給ゐとせあけーうーうー姫やさんとに
やはてをつ者ことにうんとあり
人ーをもひー　玉色兄弟きりひるとー　源氏兄弟
とをてうーくも又兵兄弟を今をてうれーくも思なり
れとれ法このをやもれめる　久く源氏の兄はれや
うれとなり
中文の　中文れ拾ふやを世上人云をを折へとを賢を
とを自他ふあをとるを

世うをーをる　彼仕　源氏
さふーく乃人　玉乃拾折越ハ彼仕を源のたあをいーく
となり
ーををてなに　内大臣討
の色さうーー　内うのるのうの色はいうーてその
ハ彼兵部へも心定となり
うの海義を　内大乃義兵義をうあるーるを
ふ御はうるを　あれてんうはに玉乃事行給や
を給ん　自他を世人いふをあのはうふをのをは文てや
二りーをれはれらん　彼仕と源とふ二方となり
あふなけるを　おくをるれ折るを

あなうの下 拍へ雑て内のこ拍なの拍を沼ゆ[ミヤ]まるとや
文作りへふと 女沼へ入りまるる八 内拍なとう城や
さんとてせなり
れまへば 女沼をさーてるを
なたのーとう 拍なくこそ内拍のうこみなくめとなり
ばうーーーよ 乗用のるゆをうひむりるをとや
ちうへざ海よ ちづうをて 退れ字
女ねをのう方うくをひ討近江兵坂なくばのうう経なり
内拍なをゆたくひあるぬ近江弁[ベイ]となり
うきいうかとも 日本紀第一云
天照太神踏[フタギニ]慍庭而踏殿[ニフトレ]殿[ニフトレ]諸[ニ]僉[サン]遊[ノ] 今案うさ宮

かを慍庭[ニフトレ]とまへうをせうの知れみこのの西川城太
照太神乃いうを沼へれ対るをするれのわををーるひ
ていをほひとなーるふ対のるゆやうをを庭をを書の
あをくけちうの紅ひなり天照太神とをちのれれ神
とをるせうとを今又を江兵と年の出るれるいな
連江兵れ殿[ニフトレ]ならうる事をたうへてるを 完
あまの岩戸 中ねをを兄[アニ]をを江兵をを妹[イモウト]なり
右今假名[カナ]序注[ニ] 素戔嗚尊[ソサノヲノミコト]太神乃こ乃うをるを
というり 嗚[ニヤウ]あまてうるれへし
近江兵こをりの沼へらをめやをうれへをとなり
叫をを岩かあを雪うなるをるをうり一れる

引まるゝ説なり　義

まれまゝ　如法殿と又如法やゝ法華堂

いろ〳〵　いろのつくかろ〳〵のなりていなり

れとゝけまやうふ　れとゝうゝへ　まるゝ法〳〵

され色〳〵

ゝとけうへ　如法没色乃つの色可愛也　たやけみもよ

くゝ叶ゝ　ゝ人となり

ゆくゝて　偽怪なる如なり

爰にとゝみたる　耶輸乃一燈なる事

むゝまゝと　胸ゝのおもひ　心をあるなり

吉ゝより

いゝあやゝを　双比　内大ハ堂宮くせとゝ

ゝゝ　ゝを一宮く望ふ書文ゝくゝせ

びゝたく　拙ゝ　ゝん法ゝゝと云ひなり

ゝゝを　御門乃法事なり

つまゝものゝ　女人ゝゝゝに云ゝを色て云ゝい

色ゝ　哢

世人をゝゝのてゝふ　内大のを法花ゝろ〳〵ぬ

ゝゝ法ゝゝゝ〳〵てゝゝ　くあつのひ法ふと世人さ海

くゝ人ゝりゝゝを法ゝゝゝてゝゝ云を畢竟孰ゝて色

ふゝを云てのひなり

藤袴　堅並

御詞并文の寒の仰討るさらんの花とあり　源氏物七

八月九月の事あり三月ゝ又月は月乃ゝ　物語不覚

此内ゝ定て内侍のゝゝよ花菜ゝる事あるへし

内侍乃ゝ　苅　里家なゝ尚侍ゝ紙をゝれて返へ内

とゝ

ゝれをく　玉心中　後仕　源也

ゝのなゝん　白

れやや　源の事　立実又心元　玉心中也

まゝて　源ゝ人ゝ内ゝ内ゝて天子御討をゝ

らゝれとなゝ中文女ゝへも見たてゝられてゝ実録あゝ

しとゝや

月の男ハ御ゝ　ゝゝれさる中　なとゝゝくさゝちてとゝ

おりひとゝめられ　源内とに婚見給へ　やもい月た給を

なとなゝ

たゝまゝる白　狂もなくめさき見ゝてありれと

智ひいふんあゝんと玉心中ゝる

うをい　脇見　ありれとも人多ゝゝんなゝ

物なけゝ　玉心中成ゝ　ゝりてゝる

さゝとゝかゝ　ゝま

内侍ゝ乃事　ゝゝ孫也もとなゝ

あのれとゝのを　源姫実なゝ

人のそしりを源乃丞ぞくくうんとき給ふ一の樋口丈
うけく　源の丞成とれまわぬひるを
ことに　実父野て様と源れめれぬなり
女れや　二親ともれやきひ安るを
いひくもく　源と内大となり
ふひ父乃　大宮うせ給へれなるへし紙ぬれ服ニ日ある分
　　亀一
宰相中ねる　夕霧宰ね沙宰ひ寒れるなるへし
外祖母　喪服直衣純父年一袖或落涙父と用寒櫻ハ服去
を冠乃うさをとれそなり
右近と冠りはする也家るは結

いまそあ一　外祖母別て寵ぬれ故ひの父と一入ありく
深くるあくるなり
いたあくさを　兄と兄弟とて色くるうる一城実の兄
弟るあくちれとそいひ去の内くくんを兼雅となり
内ろうれ性せる　内伯乃事と伝話出くるる城源
ろひ夕寄して玉へ御をくまくるを
くくてあ分　兄弟とれりひしーなり
きくあきくめく　夕と兄弟なるぬくる成なり
れ分ーをなくし　源を玉と文沙くへに中一沙てもけ
ちくハあくんと夕れひ中なり
さけくろ兄ぬある　人内けくを中文又お沙なとを姫事

うむけうしうしんとるを
人をさうす　源氏物語云ことゝ行ゐうとなり
をせうこと　源乃行ぬるをけ行くり
〳〵なるぬすら　天子さふひ玉とわ位をすゝしたる事
なやをなうこ
れえたけふまく　夕の心底や
法ゆくを七月まを　三月をれた八月廿日ひたるゝ夕や
花法華経
十三月まを　出河原解脱すること　をらひとする
なり　服をとくむなり
人をあまをく　源乃御あけなをは解脱あゝを世上人

可知習いのことある法心を鶏あ分となり
あの意ゆゝ夢と書らま蘭をもらんとあり
もゝさゝと　面白詩ゆや　中ゐを大文のる　鶏恩の
たきむうりむうる詩や　縁とある事をたのひ行ふ
八学曲となり
うゝこ　斎城ゝふ今を叶ゝ　花衣あゝ中も和と申
歌うれ
あやたうゝてけふまを　源乃玉城の行文とゝ行ふ事
城ゝうなるゆゝとをたゝ　夕の心底や
あゝうゝうを　服なくゝ何やも不思ゝてあらんと也
夕朝の苔行ゐねをを今不霧むく

何ゝを　夕ゝへ　恋ゝ分あとゝ　ゆくゝ　不思事　詞書

たゝとゝを　知乃心と　思ひわりんとする心ゝ

又ゝこれ　孫と分別　をんとする　而　まても　行ゝぬ心なり

らふ　ゝ　表ゝを　知ゝ　但　なゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

らんとあゝなゝをゝへし

指後悪ゝよハ　ゝんひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

たゝとゝ　らんとゝらんとあゝ

あ道も　ゝらんすへき　春蘭　夏薫　なとゝ　ゝ　ゝ　ゝ

薫茅と　用兄弟のゝとに　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

と云　夏ゝを　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

らんたへ　一向に　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

河海　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　一向に

松の根と　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

上ゝれ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

れゝ　ゝ　ゝ　蘭　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

夕ゝを　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

みちゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ち　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

たゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

にゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

あゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

我ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ふき　田野とゝひーのこを結こ弱おうす笠結と名く
ゆこ弱結こをやしかこと　そうとゝたこるのあちこさをを
と可こ心は　花をも可結
やうこて　おをのけるのよとのなを可のむとのうれんた
めれ詞なり
あさきもあうきも　ゆのむ心をまのうこをあこんとなり
海めやうふを　文仕のむの　又をうるを初の兄弟と云む
うや
今りこ　めれ中ーせくを分と蓋てもあちんをうを
倦めんを今をこ結るーー新波なる分城つくーてもあを
んこをおりの

乃中ーお　兄弟と不云ーて来ーれをみーの女ハ今歌中
乃めれうへけやうよ成こるとも今れこうのまーく分乃
成こるお乃中ハ今を分をく別てなくさ海まんとうや
めーぬなり　双
うんの元　ゆと家よ嫁てお出ーこを
いけまもーめに　蕊上　野ふ角れなり
れまへう　源れ浄前こること
いて行ひける　源外指へ出行へり
あの文つの色を　ちぶく源討内伯のこるを成てを
ぬくなるひ元成行ふなこを妻乃中なるーて
文なやを乃まんじ　てこ　まんこ云詞の　綜弱なり

言葉するひとりへ文を兵部卿
ちてを　名代詞　人を為るの意を付て可為人称
うとなり
わきとられすちの　あ活用キ　くをるれ文法りへよ兵と
引たり色活くく別て御中乃活兄弟の順あくんと
のおるり
くーや　新発ヒとるを　変ビツ　ふてもふるれく独して
新定ヒタメ一大るりとなり
りの母きを　名新ヒの上乃るり也
山ちとり　ゐりくれ位ーとなり
りのれとくる　ちりれとく言ひ八とこなくへと也

活用くくをり　ありくくをれ活をくく活くなり
文の活人りて　兵のれ方りてよりくんと　源氏
ゐを新ヒめ紀する　ゐ乃活
のたまふを　りくきの名れひ　源乃ひ活をるれりよ
ゐ紙ヒのたあなり
年活りく　名詞　ひがさ為　源の好文ひりとせる
ヤとるを
大ヒ　雛ヒの変ビツへ付て活を源次弟とあるとなり
りくくひと　源の物ヒめさきんりを又文活の色る
ゐ紙を指をし活ゐ事もふあるとして段仕ヒ文位
てとなり

女ハ三ツ　儀礼云　周礼　礼記　儀礼
婦人ハ有リ三従之義無シ専用之道故ニ未嫁従父既嫁従夫夫死
従子故ニ父者子之天也夫者妻之天也　三従乃儀なりし源氏
此蔓文なれ共又実父ある男を源氏とや　あるれもと云
詞すそ也早　花鳥余情
咲いてをたつ名も　源氏也殺仕の心ふ可住居をさいをた

文流くともおにとをも花これよりハ内のおとく
のやうて見と源氏よ夕霧のかうりやうてそ
此そけ不花れアヤニリト之
女ハ三ツよ志てふ花女子ハ幼時ハ父よ志たかひ
ともをそよ夫ふをふろくハよろつ源氏の此ん
のまうなん三従のつてをいひ向へしと内ち
臣の此例ふとく源氏の君をよそおるまりしこさ
とかくもとうとそき此ふんく
此そけ不モ花ほにニリト之

こすや
る源自身乃事珉仕絡苑
殺仕此心中をとやし紗稲り
此ことあるなの時をんを同苑
豈よなをおりし人のまへよ懸てすそうくらうり殺仕

ありゆつり須ふとなり
ろうもんと　らうろう　呉本
論せんとある時を　論字没定するりくさへ成の論志
てのむすや　らうろうと云時を多獣とこめをくむ也
狼之馬牢八獣　呼又心をくしこめする心可猛の
うとめ成すなりとよろこひ　忘実を忱熱にあるまと
るつと　イヤサ二蒜字
けふさを　むとなり
まうくしき　曲心の　根心れむれろくさむくも也
いけかさう　心の清派をみえんとるまと
おりひくかたしや　花坂撰云川　いけりくさふ志めくれ

ぬハこう　儀礼云　周礼　礼記　儀礼

婦人ハ三従之義ヲ専用之道ト為ス　従父　既嫁従夫　夫死
従子　故父ハ子天也　夫ハ地也　三従乃儀なり　源氏
礼義なれ　又婦人ハ　源氏とや　あるれとも云
詞なれ　平

花御前

詞なれ　源氏物語
ないてとたうるそ　源氏物語　殺仕のむふ可笑をこいとた
のつんるまあ　ふまーきとすや
をれのむ　とあるいの　源自身乃事　成仕れ
うちくゆも　ゆくく　殺仕れ心中とも　行なり
内ゆもハ源乃法内也　内ことあるなの時をむを回れ
慧上なとなりひ人のまへ　極てすそうくらう　殺仕

うゆつう法ふとなり
ろうちんと　らうろう　吳中
法うせんとあるなそ　論字変定するうこへ　成の端也
てのむすや　らうろうと云なを名　大変とこめをくむや
絡之馬宰ハ　大変　哢又むをくーこめるむ可法の
うくあるなりとろこひ　玉実を牧者にうくをと
なるこ　イなを蔵ま
けふさを　むとなり
まるくーさ　曲　心の
いけかさう　むの清　水を見うんとるを
なりひくなりや　花御撰之川　いけうこふをあれ

はるみやとそやはひくさなく人のなりゆく

私　はたりひくさきたりのみうひもなれの

牧うこうひさ　うこうこうこ夕乃心なり

れとこをさるをや　源世上乃風雪むと思ふなり

あんふれたる　又外にうをを　如蘭こをあこうなり

文たうへ乃　文つり色まくさ畑まれ人きた撥蘭むや

むこうくれされこうこうきた仏やとなり

月さこさ　九月いむ月や

きあこたふ人く　蘭兵　鶴名ちを

うけこ滝を　てをりへてを乃滝をせをねこも人れ

ひきいりこをたるふ　仏牧ふ

中ねを　夕雲

文つの色ほとれ　むの長爽乃兄弟方なり

うこつ弟なる　指れむへのむ乃かるとこうる成るを

撥れのけ　庭前乃撥の陰や

駅中乃のいうひたる弟なり　不門せの

夏なきと変やもたこてをれる月の撥れうけかく

はて　討はこりり

みきこいおへく　兄弟と　不云るをとなり

宰ねの老して　むりとこ　如雷方や

こもぬたとひこ　いこふうや　うすなこぬこをもき

撥こをあるよ何とここるを如陶仏をとるを

こだい めいらーうちにあるもの連枝をとなり
畑ーと 女曲(キヨク)也
かくまてとるめ 玉れ討結句(ケツク)とる先行ふこうようそく
ーたれとなり
海いつを行きん箱の 人肉のるも涙次肉こ乃事を
うきたさきれと肉大のくらふとなり
中く 肉大蠱(モキ)乃ハ後心りとる礼とるを
いてやれこうのきー 乃中ね討まへけけうの文なや仕
第ーるなり
いけうこうはなても 兄弟と又さをくうれ生さ
うとの二方なり

小れをそぶ一ーめーいまて 肉このるも
そこかとへめーいるを事をを恋(キミタチ)をうい叫くと思ふ
色られ世めくトつうを色と盛をとなり
叫くうんとれこを 女房衣玉へ中なり
けふ人きこを 我仕乃子ゑく兄弟と中さんきいうこ
とてなり 玉れ討
いつを中く 兄弟れとくあをーめのかを怪(ケガ)てとなり
妹せ山寺 いとせ兄弟のるも也 百妹(イモセ)兄ゑ云
はうーうの中ーるのーるうのなることの箱弟んはなるぬ
さ海ーうみをそれを 漢人不云
ひつまーまいをせの山れ中ーるふ海はるをのをれを

もさぶ　とさしの橋ハ　あるこゆるふと云ふ所をもて

板橋遺　　道雅

みちのくの紅絞の橋や色なるゝん踏こゆまはすこゝむまて

きひ　京の所　心同

津國の名にをはるきす山城のとそふあひみんこゝ

ろこそ

人やりなるを　我心うゝ又なきゝてけるとなり

まとひきる所　恋迷ハ行とも不出してをしと也

あきみゝを又ゝうをもるを

いのゝ所のあと　相を兄弟とかりひて君をたひし

やゝん不別なるをしやるを

何事もわりなし　恋乃心を女房に申をり

をれつゝ　今ゝハうとくしくをれをせしと也

うゝすゝね

何事とあきをけくやもなのねをふ人忘事をふと云也

あうくらう　労をもりてこゝを服をせ先とする

ひくぐん　学問を　労乃猶しゝをとなり

又義格勤　ほひすゝ人をいゝりは俄　時　可能

ひぐと　吳竹て丈不へ

恋ならひ　のやうの人出世をゝ世ゝとなり

大ねハあの中ね　難思大ね中将同右乃もけとする

くゝすけせう　大中小ねや　花ようゝ切のゝ

王相国をも
はうしーろうと　今上乃うしーろみよ成へ文人なり
さるやう　源のれ引ーめ文筋（スチ）ちうとむ妙法ふ加護（ヒエ）法ふ
とるを　殺仕乃法むと可くあり
むを文のめは　母女法也
妙法い表　嫡女（チヤク）　第一れあねなり
れかなとつ番て　年ーあるくてあると嫡（カシ）て今むと表
対法へを　嫗（ヨウ）老女乃るを也　北双紙（ヒクラノウシ）ゆもを詞なり
そのすちふ　芸上の郷（ヒヤウ）とうむき法ふゆへ失ねるへいの
うくふるを
めれとく　むれ実文（ジツフ）なり

法れもむけ乃　源れ〳〵くを文つの色のるを　殺れ法すと文
弁乃れをも　むれ女房（ヒヤウ）　大ねれるのこ人なり
るすなくをこの　又月九月ふいむ月ふれといむ月の金とる
や月くをへ内をへ文　文なを　もうすなくへいやふ望を
りくなり
いふりひなれ　人乃むれうつ法をーてもとるを
為日乃をこの　玉簾乃桑弓にとける白髪乃今いくー世ーて
我るくなくふ　為日を天子を法しても元服（テンカン）を觸（フレ）法ふ
やも桑弓れ新乃あくくを法身の新城心を わするなと
るを兵の為を新うれを
下れれ　簾（サ）の桑弓れるを

おあひたるや　髭黒(ヒゲクロ)なれと兵部卿の御使とゆきあひたる
わすれすんと云　左兵衛督　義孝(ヨシタカ)卿
忘れぬと思ふ心を忘れすんとは思らんすゑの海ゆゑ
海よりも　面白きなるとそれまくなり
れ別(ワカレ)しぬ　入間ふてきぬ　ひのひて歌をうつしかけて限(カギ)なし
あるとむろの花あるこもるこのいとも　向日葵(クワウジツキ)　湯殿(ユドノ)葵と云
のうれとさうしさいつく
[illegible]
為之作(ナス)むかたとくらと二条乃世人はまさうの
をり別(ワカレ)世　朔日さすの世奉行　ひをてとはう
き世里歌(ウタ)をれとも里歌をもれとも歌をもけさ歌をや
をむ(ヨム)ひ(ヒ)ぬ世為(ナス)とする

きりうを　玉乃世ひをを(ヒヲヲ)ぬ(ヌ)と文の御(ヒ)世
女の御心を人知(シル)ぬ　りうを果して筆者ぬ(ヌ)なりをん
女のいんうの花女のいんいをうめて文をそるひ　上ハ竜上又むハ蛇(ジヤ)の女房のを
きりうをんとかをうをうの思ひつるを　ふひ(ヒ)為(ナス)るのせたる

義淺御(ヒ)歌(ウタ)　やと又ひ(ヒ)奏弾(ソウタン)と多(オホク)書り

おあひたるや　髭こきたれと兵部つの御使とゆきあひたる
わすれすんと云　左兵衛佐　義孝集
思きぬと聞くに忘れきと思らんすみのさ海ゆ
さ海よりん　面白きなるとそれまくなり
れ別しこしぬ　入内のてき世ひ〻しとも房前四くつこ
あ〻ろそて云　葵を日にむりひて家をうこみけて限ぬ
聞くすまや　文集　鴛鴦向日葵　濤葵と云こ
身をけ〻しむかたとくらと二条乃世人れきこの
をり別まや　朔日さすの世奉ぬ　ひをてとなう
き世里来をれとも日もれとき者ともけこぬ世ゆや
をむ頭ろ〻ぬ世ゆとる

きりこを　玉乃世ひをおぶ世と文の御物や
女の御ひをへ知ぬりこ果して筆者かれよりもん
とをとの御ものや　紫上ハ竜上又玉ハ姫おの女房のな
なかなりんと而ノくふひ世絶るのせたる
義俊御歌　なとと又ひ奏弾と多葉り

玉木抄　般河　玉かつらの抄とあり

以下前巻名　源氏卅七より卅八才の十一月迄の事

あり　此巻の始に鬚黒の宮か玉乃城になり

内よきこしめさん　此後花宮河瀬花

内よきこしめさん花これよりひけ黒のちねと
弁のかりとらんしるとして玉かつらの君よかよハ
しそめさうるす入内のうちよりそうていとき
入内あともちきよかりけとのあきそん内よきこ
ありてハれとうめもあるくれハまつく人よと
らさしとおとくとうしめてれハこの人さいさか
ききてねかとく源氏の君も内のたよくもまう
ねかすかれハあらよ玉乃の月日とみ物託
よまうしこめをと弁のかりとなくてハまうまし
きうすまうて一やうのうきさ後物託のめてよ
あうとく思ハれし

にあよ月し神のちま尚侍に成て

りるすあるまし事なれ

とうめもある想まるすなるに

しと源氏君も源を後仕も云

ね思いけあそせるとも双紙

すもあり八さぬるすめなりく

ちりし人のを源氏活むや

さしもと行くと　大ねの神也

髭かれと　玉乃大将をとし後めときかしめをむすめ

いみしう　大ねつくく思へり

よその袖ヲり　玉をとみて出此りうち坂よ系の掲に出

してもとねの行へとなり

りし山乃ほとけ　菩薩と云事玉鬘乃巻よきるし早

ごあんあしきさる弁出仕しさす

石山の佛をも　花ひもとへの石ね石山の観音よ
玉かつのすといのり給ふろくし
寺のきんも花石山寺の佛の法施もあるれろ
とらかるり

ひくるしきさ　此方物気や

むかさ花　大ね此方観音へ祈念ハ不識観世の仁ためさる

出此とや　玉のむ所西乃人さるましいさくとぞ

志賀抜　　板河　　[illegible]

[illegible]　源氏物語　七ようち物八ゝの十一月ニ[illegible]
ある　はきれ姫に難儀の宮ゆ玉乃成行ゐり
肉ゆきあーめさん　はゝ後花を可[illegible]
難儀と存のかもとゆ玉にのよ[illegible]祝ゆ嵩ゆ成て
いゆたへ肉をなれてゆめるゆあるまーよ事なれ
を肉ゆきあーめーて法とゆめもあゆ想ゆるゆなるに
ゆりてゆゆゆゆゆゆゆゆと源思ゆを也源を被仕も云
法をて乃事なゆゆ也法ゆゆゆあをせゆゆゆも双紙
ゆあゆゆハさあゆゆゆ姫ゆゆなゆく
ゆゆ人ゆを　源れ法むゆ中

きゆをを法くを　大ゆの弥也
祝れと　玉乃大将をゆ肉ゆとれゆゆしめをゆるを
いみゆう　失ゆゆゆゆ思へり
ゆ玉れ酒ゆ　玉をみて姫れゆゆれゆるゆち祝ゆ玉の物に祝
ゆをとゆゆゆゆへをなり
ゆゆ山のほとけ　芽を帰と云事を鬚れ来ゆをゆゆ早
こをゆゆゆゆゆ　玉の法きゆんあゆきゆる芽出仕をす
して[illegible]ゆゆゆ
ゆくゆきを　水方物氣や
ゆゆされ　失ゆゆゆ観音へ彩念ハ不[illegible]れたゆゆ
姫れと也　玉のゆ面乃人ゆゆるゆをゆいをくをを

いまきたりくけとゑのことはうつりの拍子よろ
ねとゝえ りの字て源をるとゑつうをあゝも密々も
あゝをゝとゝや
まれもく 殺仕なとるを
きゝきいやをなく 源乃ゑれ許と儀式才能ゝて大ねと
のよりゝ行入り
めゝこゑ行とり 大將方のねをゝまゝすゆへなり
いりゝるゑもんれ 源れ異見なり
中くめやをゝめを 大ねへ ゑ乃れゝ付ゝる成をと
むさゝをありなゝ 内大臣ゑゝゝ成会法ゝ思へ
やもとなり 呼

いめゝをて 如法まゝをハと思ひて内大臣いのゝと
おゆしめゝの行ひゝとなり
けふみのゝく けふくみりて成せ人ゝりれゝたゝ
なく堂面あゝんと乃むゝ成 双法也
みのれ秋乃 源ゝり大ねへ 三日秋の祝会なとれ儀式と
殺仕を行ひて法祝無なり
ありゝゝきせめゝこと 源を抱実父許と殺仕も思ひ行へ
と源也ゝて密也もなく大ねゝゆつり紗でありゝと
きるゝと世ゝゝをるゝて行へし
くちめゝを 天子と乃とめの出縁あゝぬゝをとなり
うけくゝく 実字文行ゝへ も成ゝ文人をゝを乃

さえん物と向坂をあやなかをみも成給ふ人とるゝと
無くしゝ文八尚侍を第なりゝの家すてめ出大将を
のよりゝ紛へをゝ心百絵ゝる
ゝも月ゝ 祈りさ 十一月祈事 一日祈祇園婦侍婦
賀茂祭王 遥拝ゝ和ゝ乃御月詣祈事 多之
内侍所ゝも 内侍司の中 尚侍典侍掌侍 女嬬 出
ゝの御あり 女官尚侍里第へ入りゝとなり
兵部乃ゝ 出色ゝ心ゝ ゝうけゝゝうゝに大ゝ方見ゝ
ゝ臺ゝ ゝ ゝ
女ゝわらゝのゝ 和ゝ ゝあやゝゝゝめゝ
ゝへゝゝ紀ゝの祈をいゝり

ゝ ゝ乃ゝれゝの契なゝねゝもゝなり
れゝゝれ 難ゝ ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
文の法ゝ海 兵部乃
殿ゝ 源 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝ腹となり
今ゝゝゝ人の心 好ゝなゝれ事 用と源乃ゝゝゝ
祈ゝし ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

けさ　きさ　ゆ　たそ　かれ　なと　をと　ゆて　うと　くし

よ　ほと　ろ　さ　すり

すく　よの　る　ゆ　を　の　ほ　ま　難　ふれ　と　の　ゆ　と　源　ら　紙　ゆ　り　ひ

ゆ　ら　ゆ　た　ま　ま　ら

ゆ　り　ひ　れ　ゆ　な　る　大　ゆ　と　難　ゆ　ひ　ら　ら　ら　ら　ら　ら　て　さ　て

いう　や

やう　く　ゆ　ま　の　ト　と　ら　る　ま　を

ら　ら　た　い　嬪姫　の　ま

ゆ　と　ら　て　ま　ゆ　ら　り　た　ら　て　ま　ゆ　に　と　う　ひ　し　る　ま　を　ふ

ゆ　り　た　の　ら　も　三　途　川　と　わ　ら　る　ゆ　難　し　人　の　ま　と　ら　う

て　ま　ら　れ　と　ゆ　人　ま　大　ゆ　の　ま　と　を　思　ハ　ま　る　し　や　な　り　但

又一二の白ハ蛍実乃事すや人のせといちんためのた

ゆの川と可ゝ心ゆ　仍法説　時もゆ家左之

ゆりひれ外　ゆと釈したま

ゆ川世川ゆ　ゆ　地獄乃絵をみてよめる歌

三つ世川波ゆみさうをなるとゆ何よ衣とゆ天ての

くらん　ゆ　ゆ儀理多之　さをのなれるまはゆ

ちやく浦ちくうし平事をみまし枕をとや又れ後

を人と云物を死ゆ定ゆる枕なれやもゆをやくとまや

あの後も可続

ゆ　ゆ　さ　な　の　源討

ゆ　み　ら　三途河の事なり

[illegible]てよさそうなり　家内嫁（サイショカガウ）の男必ず川越引渡すと云こと

[illegible]れてのさきそうなる花源氏むろまの元と　[illegible]乃事

密々のあるといふ河海の流れなるに[illegible]なる事也

[illegible]たゝしこゝ実ならんともるれ〳〵しさい　[illegible]むとろのなる事也

[illegible]ことを松うてはるうあうしうこゝ実すの[illegible]ると　時[illegible]

のるきえうくさかよとうてこれてのさきく事なるこれる事

[illegible]うひさうきんと実しあつるもとと

[illegible]かるひあるうや

たくひなく心あるて四方に君又ぬしかるべくもあれも

しきと可心得

きくるゝと　玉ゝ源の詞となり

内裏乃ゆきすぎ　内裏（ダイリ）ゝ源詞

をれの袖と　大殿の袖ろむを仕（リヤウ）ずる事となる

思ひうめ　大裏（ダイリ）へ海いゝをんの事となり

二条ゝ院ゝ　玉の奥（ビツク）　菱上（ヒシノウヘ）乃丈（チ）と二条の院ゝ

とゝうりや

ねすをさ海ゆも　玉ゝ人内の事となり　ゆをけちう

心なやをもるを

のこゝ　大殿へ玉乃わをさるを松をんる　ゝ源のゆゑ

ゆふまき汐や

ゆるし文あを汐ふ　人内乃事うとのうゝ大殿乃

ゆるし汐へを

女房人よ　ゝとうをまるんまて　双地

大将の中ゝ小方の人ゆもに行ゝ捂（モノケ）気加むゝとして

法をあるなり

治てよさそうなり　寵初嫁(サイショカガウ)の男必ず川越引渡しと云こ
おもしろき事も　ひさしくのるゆゑ
たまくくしさ　愚癡(チ)と云むとろのなるゆゑ
子なくくおりひのきくくると　時まさし
又うーろやもさを　奚事(ジツジ)なるそれてゆるる
たくひなく心あるてゆきて君又ゆしふ行くを考れも
しきと可心得
きくくると　玉れ源の詞となり
内裏(ダイリ)乃汚手沙　内裏(ダイリ)れるゆ城源詞
をれの猫と　大殿の猫うむを外(リヤウ)ずる事とるる
思ひうめ　大裏(ダイリ)へ海りくくもんのことなり

二条れれくく　玉の奚文(ビツブン)　奚上(ウヒノ)乃文(チ)と二条の花くく
とーうーや
おのをさ海ゆも　玉れへ内の事となり　ゆそけちう
心なやさもるを
のーこゆ　大殿へ玉乃わさを行くんるゆ城源のゆゑ
汚ふまーき汚や
ゆくくし文あく汚ふ　へ内乃事うとのかくくと大殿乃
ゆくくし汚へを
女房人ま　くくうをるまんまて　双地
大将の女れ小芳の人ゆもに行くひ抱氣(モノケ)加むちとして
治産あるなり

なのめふふ　玉の形容くれたるとする
うのうゝひし　源氏れいのおもてめさんとうゝ
かひるなり
人きゝやさー　ちつのーきゝとゝむるを　所也
何をて為れいうゝ　むねゝん年のおもきんこ
ゝゝやさーき
ゝゝのあゝん　武敦つ文法世の中ハとなり
今をかきられか　おのの心
ゆゝなと　おの方相断りおすてゝゝなり
玉とみのきる　玉うゝのまゝ六条院をみて乃国
うゝしなり

ゆるふれ　おのへ大ねのゆ様討難之のお方をいひき
けゆふ討るを
さゝをあるゝゝけまゝ　うるゝゝりありをつまゝーを
ゝゝふとなり
おゝゝゝうゝむれ　相下れ別うゝむうゝゝゝひの討元
ひとわゝりゝゝゝゝ　むれかゝ所のむ乃かりゝぬ
の様ゝんゝゝ紛ひて坂のはゝゝを理となり
今ゝりー物て法らんをよかーこゝゝ物ハて相法へき
ゝ　さをありめへき事　るれゝも也
海ゝふおほしゝゝ法るる　美ゝりゝとなり
ゝりーうゝ　我ゝゝはーうんなうをんゝとゝとする

ぬしうと　まうけうのなこや
そこの元　女房達なり
うつしゑ　畑のけうれうなり
かあるる　かあるるかとの詞なや　かかれかすてれ事
のかくしゑとる
みとれ　実別なる心や
あたうふすかへか　つとめきくもあるぬなり
実の浦くしゑ　大ねの討
ねはきれとくれ　高位ホのるきいふる及ますとるる
人のつくさを　かのあれ討
いうてのみしならん　文文くしや

こと人うやを　大ねかかと紫上と兄弟とるる
れハたくぬさ海うて　玉のつくり弟をたくぬさ海
まて源のあるくかひちを海なり
ゆ恋もたくぬを玉れ事元紫と心ゆてきむつのしきの
人のれや達をを　紫上かかと兄弟なれとも玉鬘と大ね
にあくすることと紫と源との恋と文れ恨海へり
あくるんやもあくも　かかハ何とるれきぬまの大将
ふるの力をまのをんとるや文文を行と紫れとなり
まつれ物ひたうひ　畑のあれ乱まあくん時をいくくや
いりきむをめれやう　紫上のるや
かりひれとされる　玉鬘の宰くたく人の上をとや

人のれやけなくらう　武紀つの文といふなり　時
紫上とゆ〜を文の法子なるよ紫上のめさるゝとれか
を〜ゝくきれやをなれとなり
むの色文徳て　日本紀史七云　日本武尊渡海ありて東夷
と征〜給ひ〜時賊徒野城焼〜よ尊草薙剣〜
と刈て向火と焼給〜也因掛ふ服立とたとへ
うゝしなともさなくゝ　わろこぬるを
ともむとて　火ねとてをときらゝとわ方見てなり
吹る日ハいのてのと　ときいひなゝるを
人のいひなり　と遂あゝもお房前源なをけ給ふんと也
立ときの行ても　あゝあゝも別よむあゝもを曲と也

小方詞
神乃こかりを　おりひけくねなくゝゆるをれ袋を神乃
おのとけををあゝ明
ゝけ　小方也
見なけさ浅　大ねを立出ゝ紀行るを
うのなゝひるを　源乃ゝ
れ切〜よ　男くゝしさなゝ
中ねりくなとあゝれれせや　紀の世ゝれとわを乃ふ
よきて私服あゝうや
ねゝさなゝあの下　殘梅の影の下烟ふをゆとも我独と
ゝ云なすへゝわを　神ゝ乃人れ牧場

いのを　法華経として書る水墨の絵
みあらはれもなく　見遂ることあくすなり
むたうひとを　物の気也
よづひ　叫也　方方の国の気也
うふれひうれ　狂者のおしきなとまるてしなり
うたをいうれ　花鳥のをれ加持せられてしなり
ひうをうりうきをうりひ　をうく
ふをうく　家花者もよいあさうれのをうをうる
ひうれひうをうけうの火取の所とかりり
ゆつよき者いとほうーんとをうをうる
ふはく　さをのてまて　国乱乃心を見うみれ
一故独外れとをうをうをとせうなり
者をよハ　悩敵字　強勝也　時
づーやのふ　変るなてしなり

このはうをふ　ゐをむのてん絵とする
者うとをうふ　気除やれうくーふの
めやをくをなり　方のむ工夫なるを
人をうーうんしなり
法ゆとの　り水面や
ひとをゆく　をくの者　糸ふもある火をうをを
くちをふ　をて　ををよをれうむをうーをうや
なをけるをるよ　双
うをを者と　大和物氣
をとの外なり　物はりうまを者にをめられし
るれやをを二佛の中るを可成となるを

いのを　沃雪として香りの水流れ　氷流れ
みあふれ　もなく　見遠ひあくすなり
むたうひとを　物の氣や
よづひ　叫ぶや　かぶ乃物の氣なり
うふれひうれ　幼者のおとこきなとするていなり
ものへひ　ものを　かぐつるひ
きをくに　すつすくおなり
むかへ　さをのてゆをして　物氣乃心を見うみれ
一故独外れ　とも　をとせとなり
書をよハ　物数字　徳勝　哮
づーやのか　変るなていなり

このはるうふ　むとむの　てん　祝とする
者うとかうふ　氣除　れうくーえ心の
めやをくもなり　かぶのむ　不成なるを
人をうーー　うんじなり
はゆもの　めり水面や
ひとをゆく　をくの表
くちれうて　ををようれ　ふもある　火をるを
なさけるれるよ　双
うえ事と　大なる物　氣へ　のるなり
をの外なる　物　ものうまま　事にくめられし
るれやをを二佛の中　可成となるを

わかの狂気なせにとるもの
いとゝ心もうく　かの方へ
ことりの　ぬけうせぬ
あちらく　とくゝとゝろとゝ
女房　一人女子（年廿ばかり）
たゝ〳〵ふうこなく　大将よ
今ハかきり　かの方心ひてさみ〳〵ぬ人
心ようし　かの方大ねよりもまする
ものれ　頼
中ねの侍従民部太捕　兵衛の舎弟
四民部太捕　大ねの息子　紙屋とも

今を例（ヒトヒ）ものを文慰（ヒヤ）大ねの家ぬし
指図（サシ）　兵乃衛　指図（サシ）なりん
兵の衛　ゝて　けか　ものれ
ぬと云り

世ゝ　侍　ものへく　なるゝんまての事
もの死なり
男　ものを　中ゝく　面白（ヒケラ）ぬ　往来（ユキ）なくて
ものを家　中ゝくうき　なんとる　今を具（グ）して
文へ　ゝり　侍へ
文乃れもをんほと　肉なと人　侍（リ）もん　時のもの　女ぬ
わひ　侍へり
ものれとゝ　源　侍仕乃天下　ものゝとぬ　ぬ

わかの御氣なやにとるもの
いとゝ心もとなく　かの方へ　をも
こゝろの　ゐけうとゝ
あちなく　とくしくとゝろもと
ゐるとゝ　一人女子（年ハタチ）接種姫（ヒラヒメ）ゐなり
ゐたゝふるこなく　大將よ所心なるこゝろ
今ハかきり　かの方心ゐてさみゝ人（年ハタチ）ゐもなり
心ようの　かの方大ゐるよりもまするゝ也
ゐのれ　頼
中ゐ伯後民部太夫　兵藤（ヒヤウトウ）の舍弟（シヤテイ）ゐる
四民部太夫（シミブタユウ）大ゐ恩ゐ紙（ニセ）ゐ

今ゐ例（ヒナ）苦ゐ文慰（ナグサ）大ゐ家ゐ
接位（ツヒ）　兵乃ゐ
ゐ乃ゐ　接位（ツヒ）なゝんなり
ゐ世ゐ　位ゐ
世ゐ　位ゐ
もゐ死なり
男ゐ　中ゐ　兩白地（ヒケ名）ゐ
ゐ原ゐ　ゐ中ゐ
文ハゐり
文乃れ　肉なゝ人（ヒト）ゐ
わひゐ
ゐれゝ　源義仕乃天下ゐ

くるれたなり

はちをうふをうまて　イヤ　をあられてとあり

山河ハうちをそち　こちハあちとかふるゝ心元

あゝ聖人なとゝ心ゝや可猿哉や

をとて　山林へ回るをせんをいのゝとなり

をれかうよゝ心を　少子ゆへなり

ひゝ抱経　但をの物経るす　嬉ゝを又を熙ゝ賀ひし

うゝも繼母ケイホれいひゝまゝうてとろうふ成ゝるを

まゝてゝをのやう　又といふ取ハうまてれ事なり

大拙成ゝ為るを

ゝ為おるを　寒人乃思ひすはゝをを為ハなゝひるを

ゝ分ゝとゝきあゝで　又ゝ今やもきこゝをでゝとゝや

ゝゝゝをゝゝをゝを　嫁ヒギミ為ゝ又乃ゝゝ只今を換ゝらんや

と為ゝゝあゝ為なり

ひゝゝ又　撫ヒハタイロ又　為ハヒラ為ゝゝ縁ヒニあり

今ハゝゝ為　嫁為

いてやゝゝ　母為ヒル為と兄為ゝ為

なれきゝゝ為　何を為おゝとなりひて為ゝまゝらんゝとや

ゝ心れ為をおりひいてんゝと云心元

ゝ心なゝ為をゝ方一おりひやゝんゝと為ゝあゝをやゝとや

あゝけゝゝと為　ゝくゝをゝゝゝ人とゝゝゝうめの人ゝれ

と為ゝて方を無放カケゝゝと新ヒキを　ゝきゝなり

ものかくことを云　岩ハやを云字とする　なを何も為る不定

世界とする

かくるまもそう　恋の位置の本さをゆくくもかく

ゆくすてのあるみーこそや　蓑氣

恋のすむ　大和家うしとしるてハなく久敷し

岩清をたりみとする

なくかな　紫上徒母

女御　武蔵つ文乃女御秋好中にとされ給ひしを

女御を　花冷泉院の女御武蔵つ文の山女し女の河内の国者とても恨なり

の事ハ入内あり枯好中文よたれ給つるを

りつるや

ものとなり

かとり海ても　姉妹　才兄　宮別士

別ハ一れ玉國也　揚貴妃　兄弟　恋

紫の一ゆへ　武蔵野の草をこれ

みる　ひをあるを

ひをさるー　遺恨　新心　なり

武蔵野　ひ浮さるー　を白てそこそして源乃

まくをてあつりひよをれ　迷とも紫上をするしやめ

さまんとあるかてなり

いとゆーこそ玉城をてあつりひ浮小事とさまんとて

ゆるきかとを英法の舞こへ　如此紫上なくを失られか

ものゝ心を云字とも　岩人を云字とも　何も為る不定

世界（セカイ）とする也

かくあるまてう　恋の位置の本さをゆくくも叩く

ゆくすてのあるりみてうや　蓑

取る未（ヲ）若黒（ニ）　文選

恋のすむ　大和家うしとしるてハなゝ久敷し

岩浦をなりゝとする也

さくかの　紫上（ケイホ）御母

女性なる　武蔵（ムサシ）の文乃女清秋好中にとされ行ひ也

此中れうみ　ひゝへの河内（ブイン）意味（ウラミ）なり

人ひとる城　さをゝへもとる城を紫上る免（ユル）し行うん

ゝとなり

かとう海ても　姉妹（シイ）才兄（ミナ）陽（ヤウ）貴妃（キヒ）

列ハ一れた國也　揚貴妃（ヤウキヒ）兄弟（ケイテイ）を殺さねゝるなり

紫の一ゆゝう武蔵野の草さをれゝあれとそ

みる　ひをあるる

ひとさるう　遺恨（イコン）新しくなり

さ其也ある也　ひ海さう

まくゝてあつりひをれ也とさ

さまんとある所ゝなり

いゝ河ゝを城をてあつりひ行ゝ事とさまんとて

ゆるき不ゝを英法（ヒツ）の舞ゝへ　如此紫上なゝを先行れ不

しきりに云儀元

ゆるさぬとある一ぱい牧うく文ちを

哺乃山をれ迷ふ子一行へ歌とを忠れ年乃行ひとれ

一みの色可能と云こ　私いかく

海のう　不幸

うの色を川めを下へのお志の義別ちうとなり

家ちりあ下沙　武敬つ　又十女源氏れこるひ沙一ちを

しあ寒ち一を

あのしぬう　今生や

ひくつりさ沙ふけるを　お方へわこを行を

ち沙ふてなり　出て失ねお方へわこを行を

ちうひきこを　ひりきつ　ちるひかれ年上となり

中くしやをやん　男へお方乃ちを沙ひりをうこ

ち沙へり

ひてうこすこ不　おをちを忠れわるを沙ふるこすみゆ

堪忍ちうん人ちうくを一やうこを沙ちる

お乃のうれて　武敬つへ一さんとて忠ちをこ

たきふなり

柳の下うさね　下駄を可能こちれ撥ハ十一月ち思

用　柳を忠ちと号を　要を知光とい日掲丸

きのさしぬを　倚れ撥要国沙乃可用

かとうこけなりうん　忠ちを撥こ一ちう難ち忠れ行と史

当乃心清ふ為う　玉れむ寧く成とる事
あやしく成るものとも　物の あるそ也しに沿ひ事となり
今まそを　相氣の君我るれそこう　憑思しつれとる事
たいめんを沿ふへくも　大ねわ也
るふ部くくに対ろうれ　武部つ詞也花
大ねれむと仮沿説如何　私花家可説花
年沿おりひうれ　玉へむうつ沿ハ久しきそこなり
大将のひろ川花事といくり
いとくひのくくしに　如方ひうく数おりひ沿ちん
と也　大ねへ對してその詞くくる花なり
ひさの　かるの父母いひの沿へり

いとるのくくし気　大ねの詞　如方世對面ねる事
人くも相思花　沿子逢わ逢ハとる事
つとさる事　大ねれとのとある事とひろぬやうう
治定してうとる事
十なる事　大ねの沿子後家申納そといへ事
八はうう仮ま花大弁と云と
姫君ま相ぬしられも　主未粗の姫君乃婦君ま仮ふると
云詞ま沿ねをくさあゆへなり
あこをう我と云ま
私　結粗の姫君ま仮ふるあひさ姫君乃ろくみう
文申　武アいへ也沿せううこあうなり

ひのくしまは　小方面の氣ゆへなり
ろけふ　子れはるゆ　をもるを
はたなるまし　武部の大ねおりたなくあくし
らひはひにとはまて　ぶいをとも
うきことを　新儀となり
肉ゆも　南ひを源とのふ祇祢を
さいくと　兵アのゆ源乃やなくゆとはかり物あり
はけいつを　入肉のゆも　尚信う成ての牧の拔交を
知ゆ事ゆや
肉ゆもゆめく　肉裏ゆも失ねの婦と　ぶれゆ忌ゆも
年の色りて　源ゆ八支　今樂肉信れくれ牧やに

い逢殿の詠まて来て典侍一人出逢てきゆと　愛文し
ゆれを知女房乃裝束とはるゆて退出するゆとも　はは相撲
のゆうくの乃表やうく肉侍を　はへ来て　承香殿
乃表面とはかねゆをくれうみをを　花
承香殿　愛震殿乃うくゆ仁寿殿のうくはは承香殿を
典侍ゆ条由　参すくゆ　上はらんをくれすとも　時
れとをはくの　男女方推来れ　事を承不定の色うの相撲
やをとくくを例を海りくすみ承るやうにあなをり
西ゆ文乃女はは　武アのゆ文乃女はは承香殿乃肉まて来西乃
事なる色くゆ　鞠馬妹の女はは承来うをくまれ
りに女はれをすれるや

めだう　めんたう也

[illegible]　れきくゐ[illegible]ほうとなり

中文　秋好中文　[illegible]激設　内大臣女　[illegible]文　女御　[illegible]女

[illegible]設の西よ[illegible]へ　左の大設れ如れ　左大臣女

御幸ゆ左大臣也　[illegible]

中納言宰相　雅とも[illegible]

春文れ女御　舞[illegible]の[illegible]　[illegible]文の母儀なる

文を春文いまゝ[illegible]ゆも母女御を呼に

あひ[illegible]の[illegible]くゝ也　花やのハかめ[illegible]ゝ

[illegible]　首[illegible]の[illegible]りこの心[illegible]度を[illegible]敬也

四又人[illegible]り　[illegible]れ御子多也　[illegible]川[illegible]

八郎兵衛ひうゝ脇　[illegible]脇　[illegible]ゝ

拍子四脇　八番目也

大夫と[illegible]太郎兵　十郎[illegible]設上あ[illegible]

[illegible]もの[illegible]文あひ　[illegible]の局乃[illegible]別てとなり

[illegible]　女房[illegible]ハ[illegible]

女房達も内[illegible]ゝ心ひくなる[illegible]

[illegible]きあるみ[illegible]　[illegible]ハ[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

ひあそくしくあらひハとやーをり
をうくしーうを 又速くなり
いとうーや 大ねれひ
ひようれをぬ 芦つみ当乃人を見のうとやひようをの
れくれをうをん 河畔
大ねをつのされはうし 直戸(チョクロ)や 左右近衛府(サウヒ)貫河
太山木ホ方 兵アひ文 大ねの唐(カラ)ぬ 大樹(ダイジュ)
今をねの軍(ヤクサ)をとヤーゆり
又なくをたうひなくや 左なーひてを花のうーう
とはるりはひを 大ねうーと云て大ーせるを姫(オミ)の
等うや

ゆへはる 百ホ方ゆへはるをひを毎ゆあーたをれをも
ひをうゆうゆく 方ホ方をとうるあれ久ーをひへひ
とうけうる地とはう為をおうるとや 引方面白
又をおをう 源のあをくなる人をなれとひーにとや
うの沖ひをへを 源氏のひなり
あをへハかやをの 天子をへひれひひくの源を親(シャウ)ふうをあ
ーをるいかくとや天子へをを一向別れるをれをうや
れをそをうひかりのうーをひなり
あやーう 勅云
うをうひかやをも 内侍のうをれ(ケイガ)芳変後之位志なるり や
はをせ一かすくせ ひ前をひうーひつれなくはひ

へかともやーさあを帳(ウラミ)へる
ふとて申く云　蓋は庚申を恒う拵市の八十九ちまさみ
あひしこやうん
さひあひ申ときを庚不定(ハイ)むや庚不会うんを文まーを蓋
を丞よはして興(キヨキリ)のあひりーときむなんを
あくるを　四位へ文濯(アサク)　三位二位を文あ紀あや
たのひ行へ紀　源よ直上文りひ行をねにうりて丞乃雖
ていーへ行ふとるを文よおの人とも思をあと思へり
文つの色九らうもなくてと　双地
ひのなーん云　三位ーり蓋乃文を用ゆへるあ階(カカイ)乃事
をらあを　そなくーーう文くるわけ行ふらめこ
をーを何やも文分別となり
昌文(カ三年)とて又文の孫乃文を蓋文　音弥を蛙(カハツ)の者ん
なにとも文城わあるをてとうあり
今ーり　文乃分別も今ーーーーんとなり
うをふへ文人あーを　人には起(ネヒ)ごとりーーせをや源へ
丞の事を家系(サイゼ)作柳は昌抵判(ニヒ)あをとをを
むつーを丞の　世人れむのくせむ行ーーをとなり
源氏なとれむを三河ふゆへうや
大殺を申く　法門乃沙彩業となり
ををーー行ふを　偏(ゴ)繕をーをとをするを云む紀
三ーーを　丞の心中　時をを　大殺をても可法とを

但はしとゝ先法師まくらくしてけてくしたゝむの
又くしたてぬ　脚不花空を大ねるとて又へ内裏をて
いと夫子れ法心中
若乃ふの　　坂撰云
先納を國經物語れ家を伯きるゝ如ふ年ノ夏ゝいとものゝ
ひてくしらひ伯てり　来まて奏伯ける法心女伯うゝ
贈太政大臣よむう色られてわくを伯ふくれてくしふ
叩よくひるすくしく成ゝうくれをしゝ如乃子れいけく
はうわなうう年院の西乃對にあうひあうきけるゝ城よ
ひうをて母うう見せたそすつまそてうひなふゝ出伯
ける　年夏　むくせわうゝまとれ之くさ

ハいうふ契ししゝ法なくらん　現すまくくれ契うあん
定なき義語る海とふ我をまれうそ
ちうのまうるゝを　ゝ玉ゝ子れ法心ゝ心むるゝ伯ゝ
我ハわまと　御門乃法心とみゝ　御門れ法心をゝふ
法師くる海をと思ゝるゝ　時
私ゝ方の我をわまくくの討にくをあう
御てくる海よをて　尚伯退出れ輦也
元ゝくくし　御門還幸あうのあるなう
ちうくゝ海くう　近衛大殿　を殿ハちうき月をうゝ讀り
九重に云　法製
叩くくるゝを叩くはくうゝ也　ゝくくるゝの　伯良

あしとや　大ねを法階のりくまねく法事守護なれ
をなり
ことなるまりまれ　海辺の事　されと法門乃海形と
みてきとなり　双也
野となつのしを　法門の法ひとみ也一枝をとゝ見と共
ねれ心を法為つゝて形便と思ふ儀也　哢
花ゆ玉の心とありいのく　仍法説も同但又哢可説也
春の空う意摘にとあ一枝ろ聖をなつのしみ一枝ねす
けり
まれ白　いくくの明来をいろふをんとなり
ひはりりき　玉れ方法双へ気為うそハなけまをもゆを

ひりを同ゆ心会てこせとの早下なり
のありみのちそ　法門乃還幸也
ふねくきゆるちれ　天子れ法ゆ多一又を源的とのうへ
を思て像なる拾ゆ大ねへこうひてゞ一ねくを
みてを同　大ねを同氣とうを
れをしうみ　大をうゆ中一服ねり
ちれとゝ　四大ねあうひ大ねへ乃事をなり
をゞい　段仕の色退なゝぬ玉とうを
ふ条段　源れ垂金りの心ねとゝも見実今文いめゝとなり
たやゝちみを　ひゝのあまれ温疫烟同をとゝをなを
まぬゝれれ引ちりの

ぬすみをしていてき　玉をうちとけぬやうなきと云ねい

ぬすしとをてよしとやうにおひてひとりはぬ

うの入ねさせ　源門乃玉れ直廉なり

心はをなり　難毒乃怒も玉のひよひはをれる里

ゆをくしれひらてゆる　平人なと乃様りなり

よりい　てよををし

いよくはりきあり　玉のきりん変なり

の代宮中も　武人つ乃文

実設ををしも　源代大和狐狸なり

れりやのふりらくのなる　和しる氣もるる人となり

法くしはと　中ラキ和氣をる兄人乃あ宮をへと会しはへ

こもりひりをてはをたてまつりはふなり

明をはもりん　右近の心とや　難毒と心りんと云義

私りも不義

うをりをてを　源氏乃事とおりひりけやとるる

又やみん又やをはりんれひに玉やをの事やをを

ひをあるる　右ひ人を源をなり

玉の法をあれやをて　なり乃親なりを足祭る人度をもり

法りん事なりをを玉のあく法るる

あの人中も　右をへはれるり成玉ひはひなり

別の巻きりきんをり　右近も玉と源との中ををりん三をを

れ法はりなく玉ハをて中　おりはりなきまりりやハ

とてなり

すゝめするこの　うゝのさきをりゝるを

をなれうふたてれもゝろれ　まうゝさもゝ久しき年成

ゆるうきるゝ　さのゝを明山吹うたのゝさを見のをゆきを

ぬむらゝめやを　皆時や　水も源と　思ぬと云ふの心成

引ふあさた左衛　略し

狂あるしい　表をまて狂れゝろやの庭まをあゝ事なり

乃ちうさけう　あうゝ　隆心なり

いやくしを　敬心なを

ゆ水れ　あやまぬ形のゆあうまうゝを見しさ事れ

ゆれれ　涙とゆあうのやうふとなり

さーあゝうを　脱月抜と題名れゝうゝあるひゝ事よ

ゆを今さゝ　ゆうまゝ　思ひとるを

よゆうゝを言　あくゝの形ゝ心なり

うけなさゝれつま　ゆうゝ成ゆをゝ心や

あつゝたゝを　和琴　すのゝきありまへ不注之

ゆをゝを不のをう　をたの色ゆをゝきゆれ原の池れ

ゆもはゝゝふうをを

おひもゝうねをゝゝなるをうや　風信上野ふ

後漢書　水の藻　たゝをゝ形ゝ植すやとゝうをを

事なり　ゆをの方　はゝゝんあゝ成ゆ　髯　とこふ

れゝれなゝて　うをれ子の事来まありを成の　時

はさ海なり　双

あのをとこひと　立てなりひれをてそ思ふわ気もあり

ほうもれをまいふ〜すうこと城

かるうの乃をきひる　玉の用捨れむや

あつまうこかりし　源氏のむと思なり

おりひしを人沙　六条院と玉れ心おるり

久よ衣と　くちなれ久に衣城深〜るいきくひ

物とうおりを

なもうひふ方　中道を玉へのあ海なり

續古今　ふと人〜〜す　おりふともこふやもいて

〜山吹の久よむと深てさなま〜　はる竹花　又

ふら気なくおりひうやまうれくと独なるくのみ

吹の花

かるくみをけく　夕ちれハ野人　みゆてふうほとをれか

かにみをけくやすれなくて　雨新うみゆるなり

をそをなまふる　ふうつくと文殿やもいて〜てあなと

ゑもおくうひとりてと思ひ〜春乃をやーさきひ友

をゆ人りけふあやーれを　双也

かりれ子乃　鴨子　かをとうをとも不ふ相通也

芳根をふう気ぬすふく鴨のこい親ろ海さ乃と字

をそをれり

うんじ　鴨子と相子搗形とのは様にまれらをり

鴨乃子を仰をそし給ふ成翁とやうの物語に例るの
浦むりとは乃ゑハ　大和乃国そりつよくれとなり
なるゝをそ　うゑりしすにゑみしぬるようそへたる
ゑゝ巣ゑ二度の色らぬ物とも　玉と鴨子ゑ比して
仰乃一平見にたとへらる
なゝのさゝを　こゑゝへ　ゑ言となり
女ゝ海こと乃　結ひ　女子ゑ多遠又母兄弟
ゑさまゝ　玉のきあゝ
ゑ家ものゝゝゝくしや　双ゝゝ言とある成大
ねゝ好ゑゝゑなをゝ
をのくれて奇　すゝくまゑ玉の代れゑれた早下や

源氏乃心中を大和邪推してわさと大ゝふ債
浦へを　畢下して和ゑ源氏へも内ゝぬなやをゝあり
ゝゝしゝぬ浦市きて　玉れき弟ようゝゝぬ
小大将聖てす気くたややをれゝふめれふをゝ
わらひふふ　大和実法なる人乃れゝとうゝゝさハと
地方なくを法見してわゝひ折ゑゝ
かゝゝきて　ゑきをゝとゝの名ゝ心ゑを
大ゑ乃やふらひ　大和ゝわかれ方へ　吋黄れ者信ハき
婚ゑをゝ　樹枝
ゝのをゝ法心　浦ゑ逢の心中
法ゑゝきゝ　ゑ木枝へ玉れ事とゝを法ゑを

うしやまうう　昭忠れむ

はるゝ　双

き年九十一月　源世八文の十一月や

玉髪　鮮乙乃男子　又東の詞ふ秋の夕九事

あり十一月九事をそ世ゝ物ゝはるゝまや

はりひやをつ碧よ　双

ちゝれとゝも　内府

ひはとり　はるゝ　むうゝと内府の妙里ゆもをとら

をゆ　はるゝ　ゝとなり

はをのなる　好文ゝ　向妙や今をゝなゝぬむまや

あのゝ　ゝ　ふれてゝふ　はるゝ　むの文ゝまてゝ

ゝくあ文か本行ゝん妙をとゝるを

文ゝけゝとそ　里米ゝそ満行乃撮ゝとめさきて月ゝゝを

はゝ事　ゝ影緑ある色ゝ　となり

あをぬ人さゝと　双

ふまゝゝひゝと　近に忘ゝ女はのゝゝへ世用となり

室相中ぬ　夕寿　奕はの人ゝそや

をゝめはゝ　れゝく月と付て求むれ

ゝゝ井　張者のむの　へ者ゝゝを月むるを

はゝふゝれゝや　世奥也滅ゝ　むなゝ色ゝ

この世ゝ免なれぬ　夕球奕ゝ所人とあてゝなり

れゝゝ丹ゝ　を江ゝ　夕乃ゝとゝむ不井ハ我によきと

ゆゝし　うなゐこゑさかりにてすゝんとうつや

たなくしと舟

城江あくたなくしと舟あれの色り回し人うつや

おもひうつへ丸

あなうの座　夕の心城也　玄四郎所城也舟てもよあく

海をわうようとなりてしわ城やも回心の

あの法うこゝろ　妙海の法ひさまゝ人あるこゝを

おもひうぬうや

うれきく人なりと　夕寿代心楽（ニヒヒ）ーてあゝみきこと也り

たゞ色り

よ敷へなこ　夕寿の　舟人を近江知城さうてなり